

とある少年と少女達の 日常

星空 蓮

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはどこにでもいる普通の少年と少女達のちよつと変わった物語である

目次

「いつもの日常」	1
1章「始まり」	
N o. 1 「始まり」	7
N o. 2 「始まり 後編」	14
N o. 3 「穂乃果のとんでもない考え !？」	24
N o. 4 「女の子の扱いには気をつけ ろ」	33
N o. 5 「ここから始まる本当の物語」	38
N o. 6 「神田明神で練習！」	
56	
N o. 6. 5 「家の中でもちやんと服 を着ろ」	69
N o. 7 「蓮の秘密と忘れ去られた少 女」	76
N o. 8 「赤毛の少女」	93
N o. 9 「穂むらで会議？」	109
N o. 9. 5 「曲」	144
N o. 10 「男の股間は蹴るものじゃ ない」	167
もう1つの日常	
銃の世界	174

「いつもの日常」

これはどこにでもいる少年と少女たちのちよつと変わった？お話である。

ある日

「こらあく！待つにや〜！」

「へっ、やなこつた」

俺の名前は星空 蓮

どこにでもいるごく普通の男子高校生だ
だが今は訳あつて姉に追われてる所だ

「待つにや〜！」

「待てつて言われて待つやつがいるかよ〜！」

「このおら、ここうなつたら…。」

「ん？んん?!」

蓮は一度止まって振り向くと

「う~~~~にやあああああ!」

「うえええ!?ちよつ、まつ、てえええええ」

バットが飛んできた

蓮は飛んできたバットを避け

「ぶべらしゃあ!」

られなかつた

「いてて、」

「ふん!これで参ったか!!」

「いきなりバットを投げるやつがあるか!!」

「蓮が悪いんでしょ!自業自得だにや」

こいつがバットを投げてきた凜ねえこと

星空 凜、にやーにやーうるさいバカ姉だ

ついでに言う俺たちは双子だ

「ふん!」

「いつてえ!、なにすんだよ!」

「今凜のことバカつて思ったでしょ!」

エスパーか、こいつは…

「凜ちやくん、待ってえ」

「かよちん（ちゃん）！」

この子は小泉花陽

小さい時からよく遊んだりしてる言わば幼馴染だ

かよちゃん優しいし可愛すぎる、まあちよつと問題があるが、とつてもいい子だ

「はあ、はあ、やつと追いついたあ」

「お前、かよちゃん置いてきたのかよ…」

「かよちん大丈夫？」

「う、うん平気だよ、それよりも蓮くんまた何かしたの？」

「ちよつとつていうか…なんていうか、あははは…」

「とにかく！今日こそは許さないんだからね！」

「うるさいノーパン通学猫もどき」

「にやああ!?う、うるさい！このダメ男のくそ天パ!!」

実は一度凜ねえが遅刻しそうになってノーパンで学校に行ってしまったのだ。

あの時は凜ねえのノーパンを隠すのに必死になってたこともある

ホントその時は凜ねえがつくづくバカだということを思い知らされたぜ…

「うるせえ！悪かったな！ダメ男で！というか天パじゃねえし！どこのギャグマンガの

主人公だよ!!」

「ぐぬぬぬ…。」

こうしていつもけんかしている

そうすると大体

「ま、まあまあ落ち着こう?二人共、凜ちゃんも許してあげなよ、ね?」

「かよちゃんがそういうなら、許してあげないこともないにや」

「んだとごらあ」

「ま、まあまあ蓮くんも落ち着いて、」

とまあこんな感じでかよちゃんが仲裁に入るのだ

こうして今までやってきたというわけだ

「そろそろ戻ってあそぼ?」

「そうだな、なにする?」

「格ゲーでもやるにやー!」

「え、ええ、格闘ゲームか、ちよつと苦手だよお」

「よしじやあ凜ねえちよつといいか?」

「ん?なににや?」

「(ぎ)こよ(ぎ)こよ(ぎ)こよ…。」

「なるほどにや！確かにそれならみんな楽しんでるにや」

「だろ？」

「え？なにになに？」

「かよちゃんか勝つたらアイドルグッズを俺が持つてるうちのどれか一つあげるとい
やっだ」

「本当ですかあ!!」

「う、うん、かよちゃん近い近い…」

「でしたら絶対に勝たなくては!!なんだか燃えてきました!」

「そう問題というのはこれだ、かよちゃんはアイドルのことになると人が変わるよう
なるのだ」

「ねえねえ」

「ん？」

「凜思ったことがあるんだけど…」

「ああ、俺もだ」

「じゃあ一緒に…」

「やっってしまったな（にや）…」

その後家でゲームをやったが、二人とも花陽にコテンパンにされたことは言うまでも

ない…
…

1章 「始まり」

No. 1 「始まり」

次の日

俺たちはいつものように一緒に登校するのだが

今日は凜ねえがいない

何故かというと…

「あ、蓮くんおはよう、つてあれ？凜ちゃんは？」

今日もかよちゃんは可愛いぜ!!

マジで天使みいだぜ。よし、結婚しよう…

という冗談は置いて…冗談じゃねえんだけどな

「おはようかよちゃん、凜ねえは何度起こしてもおきないから置いてきた」

「ええ!?!」

そうなのだ今日の凜ねえは何度起こしても『あはは♪ラーメン♪幸せ♪♪』つて言つて、もう全然起きないのだ。だから仕方なく今日は置いてきたのである

「いいの!?!それで!?!」

「起きないあいつが悪い」

「え、ええ……」

(いいのかなあ……)

凜のことをよく知ってる花陽はちよつと心配になっていたのであつた……

……

ん？ 今何か聴こえたような

「なあ、今何か聴こえなかつたか？」

「え？ 何も聴こえなかつたよ？」

かーよちーん！……

「うん、やつぱり何か聴こえるな、うん」

「そ、そうみたいだね」

全く、誰だこんな朝つぱらから

大声出してんのは

迷惑にも程があるぞ

しかも何だ？ 大声で人の名前言ってるし、

全く、何だよかよちんって……

ん？ かよちん？

「え？かよちゃん？」

その瞬間

蓮の顔が青ざめた

そして、恐る恐る後ろを振り向くと、そこには
ものすごい勢いで走ってくる凧がいた：

「よし！走るぞ！」

「え？ええ！？ど、どういうことおお！？ちよ、ちよつと待つて、だ、ダレカタスケテエ〜!!!」
何かを察したのか蓮は花陽の手をつかんで走り出した

凧はというと

「に」や！？なんで逃げるのかにやあああ！？」

そして蓮たちは

「急がないと遅刻しちまう！」

「はあ、はあ、」

そして…

「ぜえ、はあ、ぜえ、はあ、」

「はあ、はあ、はあ、はあ、」

学校に着いた

そして二人は時計を見る、

「あれ？遅刻してない、？」

「そう、みたいだな、」

「うーうー!!にやああ!!」

「ぶべら!!」

「れ、蓮くん!!」

「こんのお、蓮！なんで逃げたんだにや！」

「凜ねえが来たから遅刻かと思つて走つた」

「なんでだにや!!」

「だつて凜ねえは朝起きるの苦手だし、寝言を言つてたら全然起きないだろ？だから凜ねえが走つて来たのを見た途端走つたんだよ」

「う、うう、それに関しては何も言い返せない…」

「え、えーと、早く教室行かないと本当に遅刻しちゃうよ？」

「はあ、とりあえず早く教室行こうぜ」

「そうだにや…」

それからしばらく経つて、

昼休み…

蓮達は教室にいた

「まさか、この学校が廃校になるなんてな…」

「う、うん、凜ちよつとびつくりしちゃった」

「そう、だね、」

「というか俺達1年生が1クラスだけだからもしかしてと思ったが、まさか本当に廃校になるとはな…」

そう、今日理事長から話があるというので講堂に集められたのだ

で、その話を簡単にまとめると新入生が入ってくる数が少ないため来年から新入生募集をやめ、この学校を廃校にするというのである。

つまり、1年生である蓮達には後輩が出来ない。

後輩が出来ないことを知った蓮達はすごく落ち込んでいるのだ…

そして

学校の広場？的などころの木の下に、

少女はいた…

「あむ、はむはむはむ、つやー！今日もパンが旨い！」

「太りますよ」

「だって安心したららお腹すいてきちやっただもん」

「そうして穂乃果はパンを食べていた…」

「あははは…」

「それにしてもあの人はいったい誰だったのでしょうか」

「え？誰のこと？」

「さかのぼること一時間前…」

「学校が…廃校…はああ…」

「穂乃果（ちゃん）！」

「私の輝かしい高校生活が…」

「おい、大丈夫か!？」

「あなたは？」

「そんなことよりもまずそいつのことだろ、」

「そうでしたね、とりあえず保健室に連れていきましよう」

「よし、じゃあこいつを、よいしょと…保健室ってどこだ？」

「こつちだよ♪」

「わかった、んじや案内たのむわ」

そういつて蓮は穂乃果を背負つて保健室に向かった

道中多くの生徒たちに見られたがそんなことは気にせず

蓮は穂乃果を背負つて保健室に向かったのであった：

No. 2 「始まり 後編」

穂「う、うう…あれ、ここは？あ、そつか私倒れちやっただった」

そして…

穂「♪♪♪♪」

「あ、穂乃果もう良くなったんだ」

穂「おはよう♪」

「……とうとう穂乃果おかしくなっちゃったのかな」

穂「やっぱり廃校なんてなかったんだよ♪だって廃校なんてあるわけが、」

廃校のお知らせを見る

穂「ガン…」

こ「あ、ほのかちゃん」

海「穂乃果！」

こ「良かった、元気になったんだね」

海「やはり相当なシヨックだったようですね」

そして教室で：

穂「いいよねー、ことりちゃんと海未ちゃんは」

海「なぜです？」

穂「だって海未ちゃんたちは勉強できるじゃん？」

海「はい、少なくとも穂乃果よりはできますが、それがどうしたのですか？」

穂「だって廃校になっちゃったらまた受験しないといけないんでしょ？ そうなったらもう穂乃果おしまいだよ」

こ「えつとね、ほのかちゃんあのね、」

海「いえ、その心配はありません、廃校と言っても私達が卒業するまで廃校にはなりません」

穂「え!? そうなの!? なーんだ、そうなのかー」

そう言いながら学校の広場? の木の下の椅子に座って

穂乃果はパンの袋を開け食べ始める

海「なぜ食べてるのですか？」

穂「だって安心してたらお腹空いちちゃったんだもん」

海「太りますよ」

こ「あははは……」

そして今に至る

海「それにしてもあの人はいったい誰だったのでしょうか、名前も聞いてませんし、」

こ「そうだね、名前がわからないから探そうにも探しようがないんだよね、」

穂「ん？ たへのふおほ？」

海「穂乃果、行儀が悪いですよ。ちゃんと飲み込んでから話してください」

ゴクツ

穂「つと、で、誰のこと??」

こ「ほのかちゃんかやんが倒れたときに助けてくれた人だよ」

海「覚えていないのですか？」

穂「うん、全然！」

こ「あははは、」

海「全……」

こ「男子生徒だったから多分1年生なんじゃないかな？」

海「確かに、今年から共学になったのでことりの言う通り1年生かもしれない」

穂「よーし！ それじゃ早速行こう！」

穂乃果たちは1年生の教室に向かおうとしているところに：

絵里「ちよつといいかしら」

穂「えつと、？」

海「生徒会長ですよ」

穂「え?!せ、生徒会長!？」

絵里「あなた理事長の娘よね？」

こ「は、はい」

絵里「廃校のこと、理事長からは何か聞いてない？」

こ「え、えつとー、私も今日初めて知ったので、何も…」

絵里「そう、ならいいわ。この学校は私たち生徒会が何とかしてみせるから。」

希「ほな」

そういつて二人はその場から去って行った…

穂「行っちゃった…」

海「学校を何とかする、ですか…」

こ「う、うん」

穂「まあ、とりあえず1年生の教室に行こう！」

そして1年生教室へ

海「なんとか名前はわかりましたね」

こ「そうだね」

海「ですがいるかどうか…」

穂「失礼します」

海「つてちよつと穂乃果！」

穂「星空さんはいますか？」

すると1人の生徒が

「どつちの星空さんですか？」

「「え？」」

穂「ど、どつちつて…ふ、二人いるの？」

「男子と女子がいるんですが…」

海「えつと、男の子の方です」

「えつと、星空さーん」

女生徒がそう言うのと1人の女の子が出てきた

凜「なんだにや？」

「なんか、先輩が蓮くんのこと探してて」

凜「ああ、蓮ならさつき出ていきましたにや」

穂「え!？」

凜「あ、でももうすぐ帰ってくると思いますよ?」

穂「あ、そうなの?」

凜「まあ蓮だからどうせまた面倒事持つて帰ってくるに違いないにや…」

穂「え、それってどういう…」

すると…

ダツダツダツダ

「うおおおおおお!!」

声と共に足音が聴こえてきた

走っているのだろうか、足音がだんだん近くなってきた

と思つたらいきなり教室の扉が勢いよく開かれた

蓮「凜ねえ、かよちゃん! かくまってくれえ!!」

凜「ほら…」

「「…」」

あまりのことに穂乃果達は啞然としていた

花「ど、どうしたの!?!」

蓮「いやそれが、あつ、さっきの…」

海「あ、先程はどうも穂乃果を「ほくしくぞくらく!」え?」

蓮「やっべ、もう追い付かれたか。振り切ったと思つたんだがな…」

花「えっと、どどどうしたの!？」

蓮「とりあえず、どつか隠れる場所ねえか!」

花「隠れる場所つて言つても、」

凜「蓮、こつち!」

蓮「掃除用具ボックスか、サンキュー凜ねえ!」

そういつて蓮は急いで掃除用具が入っているボックスに隠れた

そして再び教室の扉が勢いよく開かれた

「男子生徒が来なかつたか?!」

穂「えっ、せ、先生!？」

「お、高坂じゃないか。それに園田に南まで、お前らこんなところでなにしてんだ?」

なんと、蓮を追つかけていたのは穂乃果達の担任の山田博子だった

穂「い、いやあ、あはは…」

「まあいい、それより星空 蓮つていう男子生徒見なかつたか?」

穂「え、ええとそれは…」

「知ってるのか?」

穂「知ってるつて言うか…探してると言うか…」

「なんだ、お前らも探してるのか？」

穂「はい、」

「ふーむ、じゃあ見つけたら教えてくれ、というか職員室に連れて来てくれ。じゃあな」
そう言つて先生は去つていった：

すると、先生がいなくなったのがわかつたのか

蓮がボックスの中から出てきた

蓮「行つたか？」

花「うん、行つたよ」

蓮「よつしや、上手く逃げ切れたぜ。かよちゃん凜ねえありがとな。あと先輩たちも

センキュー」

海「い、いえ…」

花「それで、先生に何したの？」

凜「そうだにや、今回は何やらかしたのか聞かせて欲しいにや」

蓮「いやあ、ね？さつきそこの、あ…」

穂「あははくさつきはどうも助けてくれたみたいで、」

海「先程は穂乃果を助けていただいてどうもありがとうございます」

蓮「い、いえいえ、いきなり倒れそうな人がいたからつい…」

凜「蓮、これはどういうことだにや??」

花「そ、そうだよ、どういうことか聞かせてくれない?」

海「そのまえに、なぜあなた達は名前で呼びあっているのですか?」

蓮「あー、そのことね：それは「凜と蓮は姉弟だからですにや。そしてかよちゃんは凜たちと小さい頃から一緒だから幼なじみだからですにや」おい…」

海「きよ、姉弟ということは双子なのですか?」

蓮「ま、そういうことになるな」

穂「だからかー、名字同じだし、なんか似てるな〜って思ったんだよ〜」

花「あ、先輩それは…」

「…」

穂乃果が言ったその瞬間二人は突然黙った

蓮「だれがこんなバカ姉と似てるんですかね?!」

凜「に」や!? 誰がバカだにや!!」

蓮「だつてバカじゃん、にやーにやーうるさいし、勉強出来ねえじゃん」

凜「凜が苦手なのは英語だけだにや! 凜は日本人なので英語を覚えなきゃならないんだにや! それにこの癖は治らないんだからいい加減なれるにや!」

蓮「そういうところがバカだつて言つてんだよ! このパーカ…」

花「ふ、二人とも、お、落ち着いてえ…ね？」

「かよちん（ちゃん）は黙ってて!!」

花「はうう…」

二人が似てると言ってしまったことに穂乃果はやってしまったと思ったのであった、

それから穂乃果達も加わって二人をなだめたりして姉弟喧嘩を止めることができたのであった…

そしてこの喧嘩をどこで聞いたのかわからないが蓮を探していた山田先生が来て、蓮は必死に抵抗するも、むなしく、職員室に連行されたのであった…

No. 3 「穂乃果のとんでもない考え!？」

「そうだ！スクールアイドルだよ！」

時は遡り、放課後…

UTX学院の前、穂乃果はいた

UTX学院のモニターにA—RISEというスクールアイドルが映った

「これがスクールアイドル?！」

「知らないの!？」

「う、うん…」

穂乃果の横にいたツインテールの少女が穂乃果がスクールアイドルを知らないと言

言って驚いていた

「ふん、まあいいわ、始まるみたいだから観ておきなさい」

少女はそう言っつてモニターを見た

するとA—RISEのライブが始まった

〈Private wars〉

「…あ、ああ、…これだ、これだよ！」

穂乃果はA―RISEのライブを観て衝撃を受けていた

穂乃果は自分にはまだまだ知らない世界があることを知った…

そして…

教室

「それでことり、この学校について何かわかりましたか？」

「えっと…」

「ことりが学校の部活動の成績などを調べていたらしいが、どれも微妙なものばかりだった

「うわー、うちの学校って昔からあるってこと以外あまり良いところないんだねー」

穂乃果がそう言うのも無理はない

なぜなら地区大会5位とか、3位などどれも本当に微妙な成績しか残していないからである。

「これではアピールしようにも出来ませんね…」

「UTXみたいにA―RISEとか有名な人とかいないからね…」

「A―RISE…ああ！」

「どうしたのですか？」

穂乃果は何かを思い付いたのか声を上げた

すると…

「そうだ！スクールアイドルだよ!!」

「え?」

二人は穂乃果の突然の言葉に驚いていた

「ほのかちゃん、スクールアイドルってどういうこと?」

「そ、そうです!いきなり何を言い出すかと思えば、またそんなことを」

「A—RISEみたいにスクールアイドルとして有名になればこの学校に入学希望者が増えるかも知れないんだよ!だからやろうよ!スクールアイドル!!」

「え、ええ…」

「なぜそうなるのですか!いくらA—RISEがすごくても私達がA—RISEみたいになれるわけがないでしょう!」

「なんで?」

「なんでって…」

「なんでやる前からそんなことを言うの?そんなのやってみないとわからないじゃん!ことりちゃんは??やるよね?」

「え、えつと…やる、かな?」

「やったあ!じゃああとは海未ちゃんだけだね!」

「はあ、全く穂乃果は：わかりました、穂乃果はこうなるともう止まりませんからね」
「やったあ！じゃあ決まりだね！よーし！じゃあ早速部活の申請に行こう！」

そうして穂乃果達は生徒会室に向かった：

一方、蓮はというと：

「癒されるぜ」

アルパカ小屋でアルパカを見ていた

するとそこに

「あ、蓮くん！」

花陽が来た、何故花陽が来たのかと言うと花陽は飼育委員なのだ。飼育委員である花陽はアルパカの世話をするためアルパカ小屋に来た、そしたら蓮がアルパカに癒やされていたということなのである。

「お、かよちゃんじゃん」

「なにしてたの？」

「見ての通り、アルパカに癒やされていたところだ」

「可愛いもんね」

「ああ、ついでに言うとかよちゃんも十分すぎるほどに可愛いぞ」

「え!?ええ、そ、そんなことないよお」

そう言われて花陽は両手で顔を隠す

可愛い…：そういうところが可愛いんだよかよちゃんは

と、そんなことを思っている…：

「あれー？生徒会室ってどこだっけー?？」

なーんか聞き覚えのある声が聞こえる…：

見つかったら面倒だから見つからねえようにそーつと離れよう、かよちゃんには悪いがそうしよう

「あー!!」

「どうしましたか?？」

ヤベツ見つけたか!?

「アルパカだー!」

ガクッ

なんだそつちかよ…：

びっくりしたじゃねーか

「あー! 星空くん見つけた♪」

「ホントだー! 星空くんそんなところで何してるのー?」

み、見つけた!?

くそ、面倒なことになる前に、

「逃げる！あーばよおーとつつあーん!!」

「あ、逃げた！ま、待てえー!」

「ふっふっふ、この俺に追い付けると思うかー!」

その瞬間

ドン！何かにぶつかった

「いてて…わ、わりい、大丈夫か？」

「お前こそ、大丈夫か？」

「つて！お前は!?將軍かよおー!じゃなかったたかしかよおー!」

こいつは杉山たかし、俺のクラスの数少ない男子の1人だ

「俺の自己紹介あざーす」

こいつは將軍は將軍でも見た目が暴れん坊將軍みたいな奴なんだ

ちっ、この見た目暴れん坊將軍め…

「それにしてもお前なんで走ってるんだ？」

「そ、そうだった！わりいがちよつと急いでるんでな、んじやなあ!」

「うーん、やだ☆」

「え…」

「あー!いたあ!待てえー!!」

「げっ、もう追いついてきたか…なあ、頼む!道を開けてくれえ!」

「あー、そういうことねなるほど…だったらなおさら通すわけにはいかねえなあ…」

「え…」

マジかよこいつ、今俺が追われてるのわかるだろ!

「だって、面白そうだから♪」

「おいしいいい!!なんなの?こいつ、今俺が置かれてる状況わかるよね?今追われてるの!だから道を開けてくれてもいいじゃん!」

すると、

何かに掴まれたような気がした

「捕まえた♪」

「あ、」

「あ、御愁傷様w」

てめえ、

「ありがとう杉山くん♪」

「あ、いえいえ、どういたしまして♪」

「たかしよ…これはいったいどういう事なんだ?」

「許せ…」

蓮がたかしを見や否や直ぐに目を逸らした

「き、貴様ああ!」

「というわけで、ちよつとお話があるのでこれで〜♪」

「これにて一件落着!!」

「何が一件落着だ、見た目がマジで將軍に似てるからてめえがやるとほんとにあの將軍に見えるから!」

「それじゃあ行こうか星空くん♪あ、たかしくんじゃあね〜!」

「さようなら〜!」

「嫌だああ!! たかし! 助けてくれえ!!」

たかしに助けを求めると

たかしは蓮に向かって合掌した

「おててのシワとシワ、あわせて幸せ、なくむ〜♪じゃねえよ! 助けるよ?! あれか、もう手遅れですつてか、ふざけるなあああ!! これは罠だ!!」

「星空くん、ちよつと黙ろうか」ニコツ

「怖い! 先輩笑ってるのに何故か怖い!! あ、あれか、笑ってるようで笑ってないつてやつか、ちくしょうめえええええええ!!」

「星空くん♪」ニコッ

「あ、はい…」

穂乃果は笑顔（笑顔と言う名の恐怖）で蓮を黙らせ、蓮は連れていかれたのであった
：

No. 4 「女の子の扱いには気をつけろ」

時はスクールアイドル戦国時代く

とかそういうのはこの小説にはどうでも良かったね！

だってこの小説そういう小説じゃないもん！

バトルものじゃないから多分！一応日常小説だから！

ギャグ要素満載？の小説だから！

多分ってなんだよ、一応ってなんだよ、？ってなんだよめっちゃめっちゃ曖昧じゃねえか

つか大体なんなの？やっとな編入ったかと思っただらまた逆戻りじゃん！戻りにくい

じゃん！どうすんの!？

あれだな、魔貫○殺砲やろうとしたら気を溜めておくの忘れちゃったテヘペロ♪的な感じじゃん、ってなんだそのド忘れはあ！○ツッコもビツクリなド忘れだよ、悟○たちもどうツツコメばいいかわからねえよ!!って例えがわからねえよ!!

えー、なぜこんな事を思っているのかというと…

「(ニコッ)」

「…」

俺は今、ピンチだ…

「さてと、なぜ逃げたのですか？」

「えっ、えつとあははは…」

「正直に話さないと絞めますよ？」

「は、はい」

こっわ!?なに普通に絞めます宣言しちゃってるの!?

高校生だよね?女の子だよね??どこかのヒットマンじゃないよね?!俺殺されないよ
ね!?大丈夫だよね!?

しかもなぜか手錠かけられてるし!どっから持ってきたこの手錠!

「えー、じゃあ正直に話しますからね!?絶対怒らないでくださいよ?」

「わかりました、では話してください」

「面倒くさいからです!」

「「え?」」

「いや、だからあのとき高坂先輩がいたので絶対めんどくさいことに関わると思ったの

で関わらないように隠れてました！」

「お気持ちわかります……」

「え!?!ことりちゃんは?!」

南先輩は下を向いていた……

ああ、もうわかりきってんだなあ

この人たち先輩に……

そう思うと蓮は心の中で合掌した

「ええー!そんなーただちよつと星空君にお願いしたいことがあっただけなのに、仕方ない、こうなつたら……」

お願い? どういう内容かは知らんが絶対めんどくさいやつだなこれうんうん、こうなつたらつて何をする気だよ。え? 本当になにする気だ? 嫌な予感がしてきたぞ?

「せんせーい! 星空くんここにいますよおー!」

んなああああ! あんな大声でやつを呼びやがつて!

「おいこら先輩? なーにしちやつてくれるんですかね?」

嫌な予感の中

最悪だよりによつて今一番会いたくない人を呼ばれるとは……

そう、今蓮は先生から逃走中だったのだ

ん？何したかって？それはあれとか、これとかそれとか

とにかくたくさん♪最悪だああああ!!

「ヤバイヤバイ…」

「えっと、一応聞いておきますが、何かまずいことでもしたんですか？」

「…」

「したんですね…何をしたのですか」

「心当たりがありませんで、」

「バカなのですか？あなたは…」

「これも全て、穂乃果！貴様のせいだああああ!!」

「呼び捨て!?一応穂乃果先輩だよ!?!」

「うるせえ！もうアンタを先輩なんて思わねえよ！よりによって今一番呼ばれたくない

やつをあんな大声で呼んだんだからな！この野郎ぶべら!?!」

「一応先輩なんですから敬語は使いまししょうか」

「にしても殴るのはどうかと思えますが!?!」

「これでも手加減したのですから我慢しなさい」

「これで手加減って、」

「ゴリラか…いつは、」

「つて！こんなことしてる場合じゃねえ！早く逃げねえと！」

「手錠がかかっているので無理ですよ？」

「それはどうかなー？♪」

「それってどういう「カチャ」え？」

「じゃあ俺は逃げるぜ！あーばよおー！とつつあん！」

昔凜ねえに散々イタズラで手錠かけられてたからいつの間にかこういうスキルを覚えてたんだよなあ

流石俺！ナイス俺！

穂乃果は追ってはこないようだな

だーはっはっはーよほどシヨックだったようだな

その後…

結局蓮は捕まり、生徒会室に連れていかれ罰として生徒会の仕事を手伝うことに…

No. 5 「ここから始まる本当の物語」

「はあ、なんで俺がこんな目に…」

俺は今生徒会の仕事を手伝っているところだ

自主的にではなく強制的に…

俺が先生に捕まったのも高坂穂乃果、あいつのせいだ

あいつ絶対呪ってやる…ちくしょう

「怖い顔して、どないしたん？っていうかまた来たん？」

「あ、希さん、どーも」

この人は東條希と言ってこの学校の副生徒会長をやっている人だ。

この人は、なんだろうすごく安心できるというか

あれだ、お母さんの感じでなんかすごく落ち着く

可愛い、包容感？があってエセ関西弁を使うところとか

メチャクチャ良い

それに比べてあの野郎、たかしもそうだけど

穂乃果！あいつ絶対呪ってやる！！

く廊下く

「クシユン！」

「どうしました？」

「うーん、誰か穂乃果のことを言ってるような気がする」

「恐らく星空君でしょう、あの人は穂乃果にかなり怒りを覚えていたので」

「あははは、そうかも…」

く生徒会室く

「で、どないしたん？そんな怖い顔して」

「いや、それがね「希くいるく？」あ、絵里さん」

「どうしたん？エリチ」

「ちよつと手伝って欲しいのだけれど…あなたまた来たの？」

「あ、はい、いつもすみません」

本当にいつもいつもすみません…

「全く、ちようどいいわ、蓮もちよつと手伝ってくれないかしら」

「別に構わないけど」

「じゃあ星空君はドアのすぐそこにあるからそれを希と一緒に運んでくれない？結構重いし、いっぱいあるから気をつけて運んでね」

「俺STR（筋力）型じゃなくてAGI（速さ）型…」

「あなたこの前欲しい素材があるとかないとか言ってたかしたら？」
「う”…」

「返事は？」

「イエッサー…」

「よろしい」

「どこに運べばいいん？」

「ここに書いてあるわ」

そういつて絵里は一枚の紙を渡した

「じゃあ後は頼むわね、こっちもいろいろ書類やら何やらで忙しいから」

そういつて絵里は生徒会室の中に入って行った

「さてと荷物はつと、結構あるな…」

「えーと、配達先は陸上部、アイドル研究部、弓道部に… 職員室やね」

「え”…」

「蓮君さうとう職員室がお嫌いみたいやな」

「まあね」

「ゲームではほぼ敵無しの蓮君もリアルでは弱弱やんな〜♪」

俺はかなりのネットゲーマーで俺が最初に生徒会を手伝うことになった時に「ああ、レベリングしたい、」などと呟いていたら絵里さんや希さんも俺と同じネットゲーマーでしかもたまたま同じゲームをやってるらしい。以来こうして同じゲーマー同士仲良くしてるというわけなのだ

俺は一応そのゲームではかなりの上位ランカーだ。

「からかわないでくれよ、それよりも希さん早く荷物を片付けましょう」

「せやな♪」

運ぼうとしたその時

「あぁー!!」

「ア”ア”!」

聞き覚えのある憎たらしい声が聴こえた

振り向くとそこにはやはりいた

そう、高坂穂乃果だ

並びに園田先輩、南先輩がいた

「フシヤアアア!!」

「猫みたいに威嚇しないでよ!」

「で、なんの用ですかね?」

「いやあちよつと生徒会室に用があつて、ね」

「それならちよつと待つててね、エリチー！ちよつとええく？……、わかつた！じゃ、先に入つてゐるから」

「え、あのおく希さん？もしかしてこれを俺一人で片付けると言うのですかね？」

「頑張れ、流星くん♪」

「ちよつと待てええええ！！後、その名で呼ぶなあああ！！」

バタン

「あ……」

そつと誰かの手が俺の両肩に乗つた

「あなたも苦労してるようですね」

「良いことあるよ♪多分……」

もう泣いて良い？

「失礼します」

「どーぞ。あー、要件を聞く前に彼は？」

「あー、星空君は外で目に涙を浮かべながらせつせと荷物を運んで行きました」

「そう、彼にはちよつと悪いこととしてしまったわね。それで、要件はなにかしら？」

「は、はい！ 私達スクールアイドル部をやるうと思つて部活の申請に来ました！」

「ダメよ」

「えつ？」

「むしろ何故今新に部活を作ろうと思つたのかしら？ 今学校側が置かれている状況がわからないの？」

「だからです！ 私達もA—R—I—S—Eの様にスクールアイドルで有名になればこの学校に入学希望者が増えると思つたからです！」

「だからこそ認めるわけにはいきません」

「何ですか？」

「学校の為だとか言つて失敗して学校の評判を下げるわけにはいかないの、それに同好会でも作るには5人必要なのだから認めるわけにはいきません」

「せやから5人集めてくればええつてことやね」

「ちよつと希！」

「わかりましたじゃあ5人集めてくれば良いんですね失礼しました」

そう言つて穂乃果は生徒会室から出ていった

「どうしてあの子達の肩を持つの？」

「そうするべきって言ってるんや、カードが」

「はあ、もういいわ… それより、蓮の事は良いの？」

「あ…」

「はあ、はあ、うわ、まだこんなにあるのかよ…」

「なんでこんなに重いんだよ… きちいゝ」

「断られちゃったね」

「ですね…」

「あ、星空君…」

「あ、なんだ穂乃果か…」

「……………よし！星空君！お願いがあるんだけど！」

「ん？なんだ？」

「私達の手伝いをしてくれないかな??」

「手伝いつて？」

「俺は今疲れてんだよまさか何か運んでくれとかか？」

「冗談でも笑えねえぞ、んなもん」

「私達スクールアイドルをやつてこの学校の入学希望者を増やして学校の廃校を阻止しようと思つて！だからその手伝いを星空君にしてもらおうかなと思つて！」

……………は？

スクールアイドル？こいつらが？手伝い？俺が？

「ちよつと待つて？何で俺？」

「んー、なんとなく！」

「なんだよそれ！」

「ねえ！お願いお願いお願い!!!」

「あー、うるせえ！穂乃果！わかつたからこの荷物運ぶの手伝え、そしたらスクールアイドルの手伝いでもなんでもやつてやる」

「わかつた！よしじゃあ海未ちゃんことりちゃん！早く片付けて星空君に手伝ってもらえるようにしよう！」

「わかりました」

「うん♪」

「はあ、これで一人で持たなくて済む……………!?!」

な、なんだ？背中に鋭い視線を感じる、

恐らくいや絶対希さんだ、ヤバイ……

その光景に穂乃果達は哑然としていた

「はあ、はあ、はあ…」

「今日はこのくらいで許そう♪」

「な、なんかすごいものを見た気がする」

「同感です」

「う、うん」

「よし！蓮君へのお仕置きも終わったことだし、さっさと運ばか♪」

「そうだな」

「復活はや!？」

「俺は回復力には自信があるからな。あ、それ結構重いから気をつけてください」

「はい」

「園田先輩と南先輩は今持つてる物を弓道部のところに運んでください、俺と穂乃果は職員室にこれを運ぶので」

「わかりました」

「わかった♪」

「ねえ、星空君、穂乃果に敬語はもう使わないの？」

「は？だから言っただろもうお前を先輩とは思わねえつて、この野郎」
「うう、」

「んじやさつさと運ぶぞ」

「は、はい…。」

そして…

〜中庭〜

「はあ、やつと終わった〜」

「だな…ふう、にしても疲れた…。」

「お疲れさまです」

「お疲れさん、はいこれ」

希はジューズを蓮達に配った

「「ありがとうございます」」「」

「良いのか？」

「ええんよ、手伝ってもらったお礼や」

「ふーんじやありがたいがたく貰っておく」

「あ、あの」

「何？」

「お二人はどういう関係なのですか？」

「どういうって？」

「いえ、先程からお二人とも仲が良いといいと言いますか、なんとというか」

「あーそのことね、実はね…」

希は蓮がかなりのネットゲーマーだということ

なぜ蓮と仲が良いのかを穂乃果達に話した

「え!? そうだったんですか!？」

「グフフフ…」

「…:…:なんだよ」

「いやー? なんでもないやん?」

「なんでも無いならいいけど」

そういつて蓮はジュースの蓋を開ける…:が、

(ん? このジュースなんで既に開いてるんだ? ハッ!? まさか…:念のため、先輩達にジュースを飲まないように言っておこう)

「先輩、貰ったジュース、絶対に飲まないでください」

「え?」

「おお! 蓮君気づいたんやね?」

「蓋が開いてたからな、何か仕込んだろ」

「本当です、既に蓋が開いていますね」

「穂乃果、飲むなよ？」

「飲まないよ！そんな危ないもの！ことりちゃんも飲んじやダメだよ!」

「ふえ？ゴクツ」

「「あ……」」

その瞬間、ことりの顔が赤くなった、今にでも火を吐きそうなくらいに

「「ことり（ちゃん）！」」

「ありやりや……」

「どうするんだよ！」

「穂乃果、ちゃん、」

ことりはもう泣きそうだった

なぜなら希が蓮達に配ったジュースには激辛ソースが入っていたからである

「先輩これ!!」

蓮は咄嗟に自分のバックからお茶を取り出し、ことりに飲ませた。

「ゴクゴク……」

（飲みかけだけど大丈夫かな、でも緊急時だし仕方ないか……）

「プハア！ありがとう、星空君…」

ことりはペットボトルに入ったお茶を飲み干した

「どういたしまして、おい、今回は何入れたんだ？」

「ごめんなあ…」

「聞いているのか!？」

「いやあ、これをちよつとね…」

希はポケットから一本の瓶を取り出した

「んな!? そんな危ないものを…入れるのは俺のだけで良かっただろ、なんで先輩たちの分まで入れたんだ?」

「いやー穂乃果ちゃん達の面白い反応がみたかったんやけど、ちよつと入れすぎたみたいやな…」

「なんですか?それは」

「あー、やつぱり気になる?これは「デスソースだ」ちよつとく!ウチの台詞とらんといて〜!」

「なんですか、その明らかに危なそうな名前は…」

「えーと、こいつはですね…おい、あとは任せる」

任された!

説明しよう！デスソースとは、1滴舐めると舌がいたくなり、スプーン一杯で喉が腫れるように痛くなり、二杯で常人をノックアウトする死の激辛ソースなのだ！

「なんですか、今の説明は、そして星空君は誰に頼んだんですか？」

「それは作sy「蓮君それ以上はアカンよ」だそうです」

「つまり、そのソースが入ったジュースを私が飲んだんですか？」

「そうなるやんね」

「ちなみに量はどのくらい入れたのですか？」

「4、5滴……」

「俺のにはどのくらい？」

「スプーン半分……くらい」

すると蓮はポケットからスマホを取り出し、誰かに電話をかけた。

「あ、もしもし絵里さん？ちよつといいですか？あのですね……」

「あ、ちよつ!!エリチに言うのだけは!？」

「……はい今回は俺もちよつと度が過ぎると思います……はい……はい……わかりました、では本人にそう伝えます、では〜♪」

「エリチ、なんて?」

「今すぐに来いと、そして訳を聞きたいそうです♪」

「ははは、おわった…。」 チーン

「希さん、」

「なんや？ ハツ！もしかして蓮君、ウチを弁護して「ご愁傷様♪（ニコツ）」そんなアホなあ〜！」

「それじゃあいつてらっしやい！」

そうして希は重い足取りで絵里のいる生徒会室へと歩いていった…

「さてと、帰るか…」

「だね…」

「あ、もしもし〜「こーら！れーん!!」ったくうるせえなあ、なんだよ！」

「うるせえなあじやないにや！どこ捜してもいないし！」

かよちんが『蓮君消えちやった』って言って大変だったんだから！」

「ごめんごめん、ちよつと用事があるから先帰っててくれないか？」

「わかつたにや、あんまり遅くならないようにやあああ！」

「うるせえ！」

ブチッ！

〜 帰り道〜

「あ、穂乃果、練習場所ってどこかあるか？」

「え？」

「だから練習場所だ、練習する場所がねえと出来ねえだろ」

「練習場所ってスクールアイドルの？」

「それ以外に何かあるっていうんだよ」

「じゃあ手伝ってくれるの!？」

「そういう約束だろ、まったくしつかりしてくれよ…」

「やったああ!! やったよ! 海未ちゃん! ことりちゃん!」

「よかったですね! 穂乃果」

「やったね! 穂乃果ちゃん♪」

「つたく、まあなんだ、これからよろしくな! 穂乃果」

「うん! よろしく!」

「よろしくお願いします、星空君」

「よろしく! 星空君♪」

「よろしくお願いします!」

「って! やっぱり穂乃果には敬語使わないんだあ!」

「当たり前だバカ、誰がお前みたいなやつに敬語なんか使うかってんだ! まだ今日のこ

とは根に持つてるからな！というか例え許したとしてももう敬語なんか使えるか！」
「えっ!?!そんなあ〜!?!」

そのころ

生徒会室では

「希、あなたの悪ふざけは時々度が過ぎることがあるの、それをあなたわかつているのかしら?」

「はい、以後気を付けます…。」

(蓮君、絶対覚えとき!)

t o b e c o n t i n u e d . . .

No. 6 「神田明神で練習！」

「ふわああ〜」

眠い、ちよつと早く来すぎたかな〜

俺は今、神田明神の階段に座って穂乃果達を待っている

何故ここで待っているのかって？

それは…

〜回送〜

「うーん、どこでやろ〜？」

「決めてないのかよ」

「神田明神はどうでしょうか」

「神田明神？」

「はい、神田明神という神社はこの近くですし、朝練にもびったりです」

「よし、じゃあそこにしましょう」

「そうだね♪」

「では何時にしましょう」

「6時で良いんじゃないかな？」

「星空君は大丈夫ですか？」

「あ、はい、俺いつもその時間には起きてるし、大丈夫ですよ」

「じゃあ6時に神田明神に集合だね！」

「うん♪」

「はい」

「りようかーい、あ、何か必要な物ってありますかね？」

「特に、無いと思いますがどうでしょう？…では、自分で必要だと思った物を持ってきてください」

「わかりました、じゃあ、俺こっちなんでさよなら〜」

〜そして今に至る〜

訳なんだが、10分前には多分来てると思ったんだけどな

まあ、ジャンプでも読んで待つとするか…

10分後

今何時だ？<6:02,>

おいおいもう6時過ぎてんじゃないか！

何してるんだよ…

ん？あそこにみえるのは…

「穂乃果、ことり！急いでください！」

「海未ちゃん、待ってえ〜」

「ふみひゃん、ふあつへえ〜」

やっと来たか、しかも何か走ってるし、穂乃果はパン食ってるし… スポーツドリンクとタオルでも用意しておくか

そして…

「はあ、はあ、すみません遅くなりました、穂乃果が寝坊してて、」

「はい？」

「はあ、はあ、ごめんね、遅れちゃった、」

「あ、これどうぞ」

蓮は海未とことりにスポーツドリンクとタオルを渡した

「ありがとうございます」

「あ、ありがとう♪」

「それで先輩、穂乃果が寝坊したってどういうことですかね？」

「そのままの意味です…」

「ふうー！ふうー！ふうー…」

「よう穂乃果」

「ふあ！ふえんふん！」

「呑み込んでから喋れ」

「ゴクン、おはよう！蓮君！！早いね〜！」

「おはよう…さてと、堂々と遅刻しておきながらパン食いながら来て、第一声が『おはよう蓮君、早いね』とは貴様随分と偉くなつたものだな穂乃果」

「あはははごめん！遅れちゃった♪」

よし、こいつには少しお仕置が必要みたいだな

「希さーん!!」

「何？蓮君」

「「え!」」

穂乃果達が驚くのも無理はない

なぜならあの副生徒会長が早朝に神社で巫女さんの格好をしているのだから

俺も最初見たときは驚いた

「な、なぜ、副生徒会長がこんなところでそんな格好を？」

「なぜって言われても、ウチこの神社で巫女さんのバイトしとるから」

「ええー!? そうなんですかー!?」

「で、何か用?」

「ちよつといいか?」

そう言おうと蓮は希の近くに行き

「耳貸せ」

「え? 何?」

「ひそひそひそひそ…」

「ほほーう、蓮君も中々悪やね」ニヤニヤ

「だろ?」

「わかった♪要するにあの時エリチにやったことをそのまま穂乃果ちゃんにすればええんやね?」ニヤニヤ

「そういうこと」

「副生徒会長? か、顔が怖いです…」

「蓮君、向こう向いとき!」

「えー」

「せやないと蓮君、変態の称号が付くけどええの?」

「それは嫌だな、仕方ない! んじゃ後で練習するんだから程々にな」

「ラジャー！ さあて、寝坊する悪い子はこうや！

ワッッ！」

「ぎゃあああああああああああ…!!」

自分が希に指示したんだけど、まあ、うん、穂乃果ご愁傷様…:

それにしても清々しいくらいスッキリする悲鳴だな☆

「あ、ああ…」

「(副生徒会長、恐るべし…)」

「さて、ウチはもう戻らなアカンから。あ、蓮君に1つだけ忠告♪」

「ん？ なんだ？」

「穂乃果ちゃん達が可愛いからって手え出したらアカンよ？」

「出すわけねえだろうが!! それに先輩達は普通に可愛いと思うけど穂乃果の場合可愛いとか思わねえから! たただだ憎たらしいだけだ! だからこいつに對するそういつた感情は一切ない! だからもう帰れ!」

「(か、可愛い!?)」

「なんだ、つまんないの〜」

希は元の場所へと戻っていった…:

「さてと練習しましょうか! おい、穂乃果! 起きろ!」

「ねえ、星空君」

「なんですか？南先輩」

「もう同じ仲間なんだし、普通に名前で呼び合わない？」

「良いね！それ！ことりちゃんさいこう！」

「そうですね、星空君の私達に対する接し方にはなんだか距離感を感じるの、いつそ馴れしくした方が良いかもしれませんが、なので敬語はなくしてください」

「そ、そうですね？わ、わかった」

「よーし！じゃあ最初は穂乃果からっ！蓮君！」

「ん、」

「次はことりの番だね♪えーっと、蓮くん」

「おう」

「では私ですね、では蓮君でいいですか？」

「大丈夫だ、問題ない……」

「なぜエルシャダイ風に言ったのですか……」

「じゃあ次は蓮君の番だよ！」

「よっしや！えー、穂乃果貴様はそのままでもいいから」

「き、貴様!?!おうふ……」

「んー、じゃあことり」

「うん♪」

「海未」

「はい」

「何かちよつと照れくさいけどまあ、その内馴れるか」

「ですね」

「うーッ！蓮くーん！蓮君蓮君れくくーん！」

「ええい！やかましい！！さっさと練習始めるぞ！」

「うん♪よし！頑張っていこー！」

「では体力作りです！この階段をダッシュで駆け上がってください」

「わかった！」「うん！」

穂乃果、ことりは階段を降りていった

「蓮君、何してるんですか？」

「え？何ってジャンプ読むところだけど」

「あなたも行くんですよ」

「ええ!?!なんで!?!」

「あなたゲームばかりして、運動はあまりしていないでしょう!?!でしたら蓮君も走って

体力を作るべきです!」

「ええ〜」

「い・い・で・す・ね?」

「は、はいい!!」

怖いよ!この人!!

蓮はしづしづ階段を、降りていった

「あれ?蓮君もするの?」

「海未が走れとき...」

「あははは...ドンマイ♪」

「では行きますよー!位置に着いて!よーい!ドン!」

「うおおおおお!」

「負けるかあああ!おりやあああああ!!」

「ふ、二人とも早いよお〜」

「うおおおおりやあああああ!!!」

海未 side

二人とも、なんて一生懸命なのでしょう！

特に穂乃果があんなに一生懸命走っているなんて！

感動的です！

あら？ 気のせいか穂乃果のスピードが急速に落ち始めてているような…

蓮 side

「ゴール！」

「速いですね」

「まあな」

「それに比べて穂乃果とことりは…」

「ぜえ、はあ、ぜえ、はあ、ゴール！」

「はあ、はあ、はあ、はあ、ご、ゴール、」

「バカだなあ体力もねえのにあんなにスピード出すからすぐスタミナが無くなっちゃう」

「ですが、蓮君があんなに速かったとは、知らなかったとは言え、先程は失礼しました」

「いやいや、言っていない俺も悪かったし、そんな気にすることないって」

「そうですか？」

「うんうん！だからそんなに落ち込まないでくれ」

「わかりました」

「では、次いきましよう！」

「「え」……」

「はいあと腕立て伏せ20回！」

「ひいひい！」

「ごとり、腹筋の速度が遅いです、もう少し早く」

「は、はい！」

「蓮君はあと2往復！」

「え」……」

そうして、

「はい！お疲れさまです」

「「やっと終わった……」」

「では、次はダンスの練習です」

え…… 鬼かこいつは、あんなに運動して疲れさせたのに

次はダンスの練習と来た…もう穂乃果たちはへとへとなハズだからもう今日は無理だろ

「やったあ！さあ！ことりちゃん！頑張ろう！」

「うん♪」

ええ…

マジかよお前らさつきまで死にそうな顔してたくせにいきなり元気になって、すごいな、これが若いってやつか…

あ、俺も全然若いや、というかこいつらより年下だ…

「あ、蓮君はもう休んでて大丈夫です」

「よかった、んじや俺はジャンプ読んてるから…」

そう言ってる俺はジャンプを取りにバッグの元へと歩きだした、すると…

ガシツ!!

「え？」

「と、思っていたのか?!」

穂乃果ああ!?

「蓮君もやるんだよ！」

「ダニイ!?!」

「じゃあ行くよ〜♪」

「く、くそっ！は、放せッ！もう嫌だああ!!」

そして…

「なんで俺もやらないといけなかったんだ…」

「なんとなく！」

「貴様というやつは… まあいい、それなりに楽しかったしな…」

「そろそろ学校に行きましようか」

「そうだね」

「よーし！それじゃあ学校に行こう！」

4人は制服に着替えた

「あ、学校行く前にちよつと寄り道して良いか？」

「寄り道？」

「良いですよ、まだ時間はありますから」

「ありがとう、んじゃ行くか」

No. 6. 5 「家の中でもちちゃんと服を着ろ」

「寄り道ってどこ？」

4人は一軒の家の前にいた

「そう、ちよつと待っててくれるか？」

「いいけど…」

「んじや早速、」

ガチャ…

蓮はその家のドアを開け、入っていった

「え？ちよつと「ただいま」え？」

「「ええー!!」」

「ここつて蓮君の家だったんですね」

「うん、ことりちよつとびっくりしちやった」

「穂乃果も…」

すると、

「あ…」

「あ！…えーと名前なんだっけ？」

「小泉花陽です…」

「そう花陽ちゃん！でー、花陽ちゃんはなんでここに？」

「凜ちゃん達を呼びに…そういう先輩達はなんでここに？」

「それは…」

「やつぱりまだ寝ていやがったか！おら起きろ化け猫！」

「フシヤアアアアア！化け猫って言うにやあああ!!」

「…」

「蓮君ですね…」

「うん…いつもあんな感じなの？」

「はい…」

3人は毎朝こうだと近所迷惑にならないのかと心配していたのであった

「とにかく、起こしてやったんだから感謝しやがれ！つてお前なんつう格好してやがる

!？」

「ん？」

凜は辺りを見回して自分の姿をみる…

「んにゃあああ!?!」

なんと！着ていた筈のパジャマがいつの間にか色んなところに飛び散っていて、自分はいつの間にか下着姿になっていたのであった…

「なんで脱いでんだよ…」

「ああー多分暑いから脱いじやったんだにや」

「お前なあ…」

「何か静かになったね」

「ちよつと行ってきます… あ、先輩達もどうぞ中に、凜ちゃん達以外誰もいませんから」

「「あ、はい…」」

「お邪魔します」

「「お、お邪魔します…」」

「凜ちゃん！」

「あー！かよちゃんだにやー！」

「何!?!もう来たのか!?!てめえが寝てばかりいるからかよちゃんもう来ちまつたじゃねえか!?!」

「うるさいにやー！」

ガチャ

「凜ちゃん……!?!」

パタン

花陽は即座にドアを閉めた…

花陽は顔を真っ赤に染めていた

(凜ちゃんなんて格好なの!?!蓮君も蓮君で普通に喧嘩しないで早く凜ちゃんに服を着せてあげて…)

「あれ?どうしたの?」

「…」

穂乃果が呼び掛けるが花陽は顔を真っ赤に染めたままで

返事はなかった

「まあ、いいやー！蓮くーん」

ガチャ

「ハッ!? あ、先輩だめえ!!」

「え? ……あ」

「穂乃果ちゃん? どうしたの、の……………」

「穂乃果、どうしたのですか……………な!?!」

3人が驚くのも無理はない、下着姿の凜が服も着ないで蓮と普通に喧嘩してるのだから…

「(下着姿…しかも、蓮君普通にしてる…!?)」

「あ、お前ら」

「あ、あなた達、恥ずかしくないのですか?!」

「何が?」

「何がって、その、えーと」

「凜ちゃんいつまで下着姿なの!?!早く服を着てよ〜!」

「あ、」

そして…

「た、大変()迷惑をおかけしました(にや)…」ペコリ

「星空さん」

「なんですかにや?」

「あなた、恥ずかしくなかったのですか？」

「全然、というか今更何を恥ずかしがるの？って話ですよ」

「「ええー!?!」」

「だって兄妹だし、今も一緒に風呂に入ってるし、今更何を恥ずかしがるってんだ」

「お風呂…」

「一緒に…」

「そういえば、そうだったね…」

「かよちゃんも前は3人で一緒にお風呂入ってたもんね♪」

「う、うん中学まではよく泊まりに来たりしてお風呂入ったよね…」

「いや、それはそれでダメでしょ…」

「「なんで？」」

「なんでって、それは…ね」

「うん、」

「はあ、もういいです。それよりも、早く学校に行きますよ」

「はい」

「あ、かよちゃん」

「何？蓮君」

「かよちゃん久しぶりに泊まってったら？」

「「せいっ!!!」」

「ぐはあ!？」

穂乃果はドロップキック

ことりはラリアット

海未はローキック、正拳突きからのかかと落とし

それらの攻撃は蓮が言っただすぐに

それぞれの方向から放たれ、蓮は防御出来ずにもろに食らい…

「い、一体…俺が…何…を」

倒れた…

No. 7 「蓮の秘密と忘れ去られた少女」

「さてと、これで忘れ物はなしつと、じゃあ行くか」

「ですね」

「おう♪」

「うん♪」

「凜ねえ達は…」

「り、凜ちゃんこれとそれと、あ、それも今日使うよ…」

「え、えーつと、」

「「「…」」」

花陽は凜の準備を手伝っていた

あいつ、大丈夫か？双子とはいえ、姉だよな？なんで弟の俺が心配するんだよ…
全く、しつかりしてくれよ

「よつと…」

「蓮君、それは何ですか？」

「ん？ ああーこれね」

海未は蓮が持つている物が気になった

楽器ケースのようだが、なぜそんなものを持つていくのかが気になった

「こつりも気になる♪」

「穂乃果も気になるよ！ ねえ蓮くん、それは何かな？」

「ん？ 何つてギターだけど」

「ええー!? ギターなの!? 見せて見せて♪」

「ねえ、蓮くん、見せて欲しいな♪」

「ああ、良いぞ」

「やったー♪」

そういつて蓮はケースを開けた

中からはエレキギターが入っていた

「おお」

「カッコいい♪」

「ですが、なぜ学校に持つていこうと？」

「言わなきや、ダメ？」

「はい」

「うーん、」

どうしようかな…

言っても良いんだけど、言ったら言ったでめんどくさいし、何より恥ずかしい…

蓮が言うか言わないかで迷っている

「あ、蓮君今日も練習？」

「う”…」

「蓮君ギター弾いてるときが一番輝いてるし、カッコいいから、〃ライブ〃するときには呼んでね？花陽、応援しているからね♪」

「…」

「練習…」

「ライブ…？」

かよちゃん、今それを言って欲しくなかったな…

「…」

「「どういうこと（ですか）？」」

もういい、こうなりや最後まで足掻いてやる

「黙秘権を行使します!!!」

最後の足掻きとして出したのがこれって、自分で言ったんだけどさ、自分でもちよつともう少しマシなの無かったの？って思った

あと穂乃果、黙秘権って何？って顔すんじやねえよ

「仕方ないですね..」

お？これは、もしかしてもしかするといけるんじやないか？

「ことり、あれをお願いします」

ん？あれってなんだ、ねえあれってなに？なんかすごい怖いんだけど、ねえ、あれってなに？

「わかった♪」

「あのー、ことりさん？なぜそんなノリノリな顔をしてらっしやるんでしようか？なぜ笑っているのに笑ってないのでせうか？」

「蓮くん...」

「ん？」

「おねがぁい♪」

「...わかった、話そう」

ダメだ、あれには逆らえねえ

えー、とりあえず一言。

「反則じゃね？」

「それで、どういうことなのですか？」

「バンドを組んでるんだよ」

「バンド？」

「バンドってこう、頭に巻くやつ？」

「穂乃果ちゃん、それはバンドナだよ？バンドっていうのは、多分腕とか足に巻くやつじゃないかな？」

二人とも、間違ってるぞ

穂乃果の場合はなぜ、バンドナをイメージした？

ことりは、バンドはバンドだけど違うバンドだぞ

「穂乃果もことりも違います。蓮君の言っているバンドとは何人かで演奏したりする方のバンドだと思いますが違ってましたか？」

「大丈夫、間違ってるぞ」

「蓮君の組んでるバンドはここら辺じゃ結構有名で、人気のある、凄くてカッコいいバンドなんですよ？そして一番カッコいいのは曲の間奏部分にある蓮君のギターソロがものすごくカッコいいんです!!」

う、うん…：かよちゃん俺の話でもこのモード入るんだね今初めて知ったよ…

「へえー蓮くんってすごいんだね…。」

「でも、なんでそのことを言いたくなかったの？」

「まあ、それは学校に行く途中でわかるよ…。」

「「？」」

「あ、それよりかよちゃん、凜ねえは？」

「もう準備終わって今朝ごはん食べてるよ？」

凜ねえよ、かよちゃんはお前の母親か何かか？

「ごめんな、いつも凜ねえが迷惑かけて…。」

「ううん、いいんだよ私も好きでやってるし」

「あの、蓮君は弟なんですよ？逆じゃないのですか？普通は姉が弟を心配するのでは？」

「うん、普通はね…。」

「それを言ったら穂乃果だって！いつも、妹の雪穂に怒られてるし！」

「穂乃果、それは自信満々に言うことではありませんよ」

「お前の妹とは気が合いそうだ…。」

「かーよちゃん♪」

「あ、凜ちゃん」

「おにぎり美味しかったにや、ご馳走さまでした♪」

「お前なあ、」

「では行きましようか」

「だな、」

〈通学路〉

「はあ、」

「蓮くん、どうしたの？」

「またいつもみたいになるのかと思うと…な」

「そういえば、学校に行く途中にわかるって言ってたけど、もしかしてそのこと？」

「それもあるけど…穂乃果」

「なーに？ジーン」

「いつまで見てるんだ？そんなにめずらしいか？これ」

「うん…」

そう言いながら穂乃果はずっと蓮のギターを見ていた

「はあ、」

「あははは：：：」

すると…

「ねえ、あの人ももしかして『Ended time』の星空 蓮じゃない!?」

「「「「!?」」」」

「ホントだ!ギターの星空さんだ!」

「最悪だ：：：」

「あの、もしかしてこれが：：：」

「うん、これが俺の言っていたやつ」

全く、こうなるから嫌なんだよ

蓮たちの方に一人の女の子が近づいてきて

「あ、あの『Ended time』の星空 蓮さんですか?」

「そうだけど」

「あ、あの、サイン書いてくれませんか／＼/?」

「え、ええ：：：」

「お願いします!」

「はあ、どこに書けば良いですか?」

「ありがとうございます！…これに書いて下さい！」

そう言うのと女の子は一枚の色紙とペンを出した

なんで持ってたんだよ…

まあ書かないとこの人がつかりするだろうし書くか…

蓮は女の子の出した色紙にサインした

「ありがとうございます!!」

そう言つて女の子は嬉しそうに友達であろう女の子達の元に戻つていつた
すると…

「あ、あの！私も良いですか!?!」

「わ、私も！」

10人位女の子達の集団が一斉に蓮にサインを求めに来た

「ええ!?!ちよ、ちよつと待つてください…」

蓮は馴れた手つきで次々とサインを書いていった…

それを見ていた穂乃果達は

「うわあ、なんか蓮くんってすごかったんだね…」

「だね…」

「ですね、色んな意味ですごいです…」

そしてサインを終えた蓮が戻ってきて

「もう嫌だ、疲れた、帰りたい、そしてゲームしたい」

「ダメですよちゃんと学校に行かないと…」

「はあ、んじゃ行くか…」

〜学校〜

「やつと着いた〜…」

「まさかあれからまたいっばい来るとはな、流星にあれは逃げる」

「蓮君も色々苦労しているのですね…」

「蓮くんフアイトだよ！」

「蓮、フアイトだにや！」

「お前らもその色々に入ってたんだよ…」

「「なんで!?!」」

「じゃあ俺はこつちだから」

「えっ? 蓮くん教室あつちじゃないの?」

「生徒会の手伝い」

「あーそういうこと、」

「蓮君頑張つてね♪」

「おう！」

なんかかかちゃんに頑張つてとか言われるとすごい元気である、よしっ！結婚しよう…
という冗談は置いておいて俺は階段のところまで穂乃果達と別れて、生徒会室に向かっ
た

（生徒会室）

「よし、ログインしよう」

「仕事手伝つてくれるのかと思つたら、来て早々そんなこと言うなんてね…」

「だって絵里さん、次の大規模バージョンアップで新エリア追加ですよ？」

「なん、ですつて？」

「ほらこれ…」

そう言つて俺は絵里さんに自分のPCを見せた

「これは早く今日中に生徒会の仕事を終わらせて、アップデートに向けてレベリングや、
お金を貯めておく必要があるわね…」

「でしょ？なのでちよつくらレベリングしてきまーす」

「待ちなさい」

「うぐえっ！」

絵里は机に戻ろうとした蓮の襟を引つ張った

“絵里”は“襟”を引つ張った、なんつってW

.....シーン.....

「[...」

「この空気お前どうしてくれるんだよ」

「私の名前でだじやれ言わないでくれる？」

あ、はいすんません...

「そして蓮、なぜ生徒会室でゲームやろうと思ったのかしら？それも私の目の前で」

「だって、今日朝から疲れたし...」

「だからといってゲームをやつていい理由にはならないわ、それに生徒会長である私の目の前でそんなことやられたんじや面目丸潰れよ。」

「はあ、わかりましたよ...」

「よろしい。それにしても、なぜ朝から疲れているの？」

「めちやくちや追いかけられた」

「追いかけられたって、誰に？」

「バンドのファンから」

「あ…。」

「追いかけられる前に、集団からサインを求められたりしてもうくたくたなんだよ…。」

「かける言葉もないわね…。」

絵里は蓮が朝から追いかけられる姿を想像し、心の中で合掌した…。

「確かに、あなたのバンド人気だものね。特にギター担当の蓮は…。」

「なんで朝から疲れなきやならんのだ全く」

「Ended timeってホントに人気なのよね、私もこの前曲聴いたけど本当にす

ごかったわ」

「そう言ってもらえて光栄だな」

「それに今度のライブにはテレビカメラまで来るそうじゃない、高校生とは思えない素晴らしい演奏で今最も注目されてるロックバンドってね」

「正直言つて来ないで欲しい…。これ以上人気者になったら困る」

「学校にとつてはうれしいんだけどね」

「なんで？」

「あの Ended time が在学してると知ったら入学希望者が増えるじゃない」

「ええ、そうかな」

「絶対増えるわよ」

「まあいいや、んじや俺はそろそろ行きますんでー」

「結局ただ話を聞いてあげただけであなた何も手伝ってないじゃない…」

「あ、そういうや、屋上って誰も使ってないよな？」

「ええ、」

「んじや使つて良いか？」

「良いけど何かするの？」

「秘密、言ったら絶対許可してくれないから」

「なによそれ」

そして時は過ぎ昼休み

（中庭）

穂乃果とことりはベンチに座っていた

「出来れば放課後も練習したいよね」

「うん：： あ、そういえば海未ちゃんは？」

「トイレだつてー」

「あ、穂乃果何してんだ？こんなところで」

「あ、蓮くん！別に何もしてないよ、ただことりちゃんと放課後も練習したいよねって話してただけ」

「へえ、そういうえば海未は？」

蓮はいつも穂乃果達といるはずの海未が見当たらなかったので聞いてみた

「海未ちゃんならトイレだよ」

「う”：： お前、あまりそれは言わない方が良いでしょう。」

「そうなの？」

「ああ、海未はあれでも一応女の子なんだからな」

「へえ、わかった。で、蓮くんは何してるの？」

「俺か？お前たちを探してたんだ」

「え？穂乃果達を？」

「なんでことり達を探してたの？」

「ふっふっふ、穂乃果、ことり、朗報だ」

「え、なにになに〜♪」

「放課後も練習出来る場所を見つけたぞ」

「ええ〜!?!」

「蓮くんすごーい♪」

「で、その練習場所ってどこ〜?」

「それは放課後のお楽しみってことで♪」

「ええ〜」

「楽しみはとっておいた方がいいだろ？」

「うーん：： 仕方ない！放課後まで待とう！ことりちゃん！」

「うん！」

「んじや俺は音楽室で練習してくるから」

「蓮くんの練習!?!行きたい！」

「ええ!?!来るのかよ：： まあいいや、邪魔するなよ？」

「うん♪」

そして蓮達は音楽室へと向かった：：

「穂乃果、ことり、お待たせしました、た…って穂乃果？ことり？どこですか？」

1人、忘れ去られ取り残されていたのであった

「穂乃果？ことり？どこですか？!!」

No. 8 「赤毛の少女」

蓮はギターへの練習をしに音楽室に向かっていた

そして穂乃果とことりはその練習を見に一緒に行っていた

（廊下）

「あ、そういえば海未は？」

「あつ……」

いや、あつ……じゃないんですよ、幼なじみですよね？一番忘れちゃいけないよね？
というか俺どうなっても知らないよ？知らないからね俺は

「まつ、いつか♪」

おいしいいい!!なに友達忘れてて、まつ、いつか♪で済ませちゃうの?!良くないよね
?ねえ、良くないと思うんだけど、絶対後でめちやくちや怒られるやつだよ

もう本当に知らないからね

「俺は知らないからね」

「ええー蓮くんが何とかしてくるんじゃないの?!」

知るかああああ!!!何?俺はどこかのあの青い猫型ロボットだと思ってるの?俺に

「ホントだな」

「ピアノかな？」

「だな、ちよつと聴いてみるか」

「うん」

～音楽室～

「愛してるばんざーい♪ここでもよかった♪私たちのいまが、ここにある♪」

～音楽室前～

「綺麗な声だな、聴いていて気持ちいいよ」

「うん、穂乃果も」

「ことりも」

「終わったか？」

「うん、」

「綺麗な声だったよね」

「行くか」

～音楽室～

パチパチパチパチ

「!?…ヴェエエ!?」

「あ、穂乃果!」

「君スゴいね♪」

「べ、別に何もすごくないわよ…」

少女は褒められて嬉しかったのか照れているようだった

「聴いたことなかったけど、自分で作曲したのか?」

「!?」

「あ、蓮君!」

「蓮、つてもしかして!あなた星空蓮?!」

「西木野さんや、同じクラスだろ?クラスで自己紹介したはずなんだけどな…」

「私、聞いてなかったから… って!あなた本当に星空蓮なの!」

「そうだけど。あー、サインなら書かないぞもうサイン書くのは嫌だからな」

「ほ、本物、なのね?」

「ああ、本物だ。Ended timeのギター担当の星空蓮だ」

「私!あなたのギターが大好きで…」

「(ジー...)」

「あ!つで、何の用ですか?」

「ただちよつと練習しに来ただけだ」

そう言つて蓮はギターケースを見せる

「折角だし、私も見てていいですか?」

「ああ、いいぞ。」

「あ、ありがとうございます...」

西木野さんがそう言うのと蓮は準備を始めた

それにしてもここ色々揃つてるな、軽音部とかあるのかな...

つよし!準備完了つと、始めるか

「ふう...」

その瞬間蓮の表情が変わつた

「...ツ!」

「Music start...」

「ふう、どうだった？」

「……」

「あれ？えーつと、おーい」

「(す、スゴい……)」

「なんか、ビリビリ来たよ！」

「う、うん……」

「やっぱり、スゴいわね……流石注目されてるだけあるわ」

「あ、どうも……なあ、西木野さん」

「な、なんですか？」

「良かったら一緒にやらないか？」

「え?!い、良いの?!あ、良いんですか？」

「えっ?やらないかって「せい!」痛ッ!」

「、こいつ… 後少しでこの小説が終わるとこだった。危ねえ…」
「本当に良いんですか？」

「うん、あとクラスメイトなんだし敬語はやめてくれ」

「わ、わかったわ。」

「じゃあ西木野さん「真姫でいいわ」じゃあ真姫、何が弾ける？」

「別に何でも、さっきのも多分合わせられる」

「マジか、じゃあさつき俺が弾いたやつに合わせて弾いてくれ。あ、曲の中盤で”あれ”やるから」

「了解」

「よし、それじゃあいくぞ…」

「はい！」

蓮はギターを弾き始め、

真姫はそれに合わせてピアノを弾いた

(楽しい、こんなに楽しいのいつぶりだろ)

(スゴいな、まさかここまで合わせるなんて)

(合わせてみて改めてこの人のスゴさがわかる…)

(やっぱりこいつ)

(この人やつぱり)

(ただ者じゃない…)

そして曲の中盤が終わる時

(そろそろか、”あれ”やるか)

蓮は真姫に頷いた

(?あ、”あれ”やるのね…)

そして中盤が終わった途端、蓮のギターソロが始まった

「ッ!?!」

(今まで何度もライブに行ったけど何度聴いても良いわね…)

そして演奏が終わり

パチパチパチパチ

穂乃果とことりが拍手していた

「やつぱりスゴいよ二人とも!ねえことりちゃん!」

「うん♪」

「良かったよありがとう」

「こちらこそ、まさか貴重な体験だったわ。まさか目の前で練習を見るだけじゃなく、一緒にやれるなんて思っても見なかったから…。」

「にやははは、そりやどうも」

「にゃ？」

「あ…。」

「(やつぱり姉弟だな)」

「ん？」

「な！何でもないよ!？」

「?まあいいや、出来たらまたやろうぜ」

「わかったわ…。」

(え!?!また出来るの!?)

「今度ライブやるけど来るか？」

「行くわ」

「穂乃果も行きたい！」

「ことりも！」

「お、おう」

「場所は？」

「UTX学院の屋上だ」

「え!？」

「わかったわ」

「UTXってあのA—RISEがいるUTX!？」

「それ以外に何がある」

「何でなんで?!」

「なんでって普通にここでライブしてくれないかって頼まれたから」

「それ全然普通じゃないよ……」

「蓮くんってやっぱりスゴい人なんだね……」

「スゴい人っていうか、有名人だよ」

「それで、いつ……!？」

真姫は目を大きく開き蓮達の後ろの方を見ていた

「どうしたんだ？そんなに目を開いて、何かあったのか……悪いな穂乃果、ことり、俺はもう教室に戻る」

そういつて蓮はギター等を片付け始めた

「わ、私も！」

そうして二人は自分の教室に戻って行った

「二人ともどうしたのかな」

「さあ、……………!?!」

「ことりちゃん? どうしたの?」

「ほ、穂乃果ちゃん、う、後ろ…」

「え? 後ろが……………に……………」

↳廊下↳

穂乃果、ことり、ごめん…

そう思いながら蓮は真姫と教室に帰って行った

↳音楽室↳

「お手洗いから戻ったら二人ともいなくなっていたので探したのですよ? どうしてこんな所にいるのですか?」

「そ、それは…」

「れ、蓮くんが練習するって言うから、穂乃果達も蓮くんのギター聴きたいな〜と思って

…」

「ほうっ?」

「(っ、っ、ことりちゃんどうしよ〜)」

「ほ、穂乃果ちゃんとりあえずここは海未ちゃんの機嫌を損ねないようにしないと…」

「丸聞こえですよ？それに私も蓮くんのギターを聴きたかったです。何故待つてくれなかったのですか？まあ、そのことも含めて後でみっちり聞かせてもらいますが良いですかね？」

「ほ、穂乃果ちよつと用事が…」

「良いですね？穂乃果？」

「は、はいい!!」

一方その頃蓮は…

「なあ、なんで教室の前につばい集まっているんだ？」

「蓮、多分だけどあれあなたのファンじゃない？」

「え…」

なぜ真姫がわかったのかと言うと1クラスしかない1年生の教室に他の生徒、先輩達が色紙やら色々持っていたからである

「あ！星空君だ！」

その中の一人が蓮に気付き指を指した
すると…

「「「「え!!」」」」」

「げっ…」

「サインください!」

「私も!」

「握手してください!」

「あ!ずるい私も〜!」

「ええ!?!ちよつ、チラリ」

蓮は真姫に助けを求めるが

「ごめんなさい…」

「そ、そんなあ…」

はあ、わかったよ!やれば良いんだろやれば!!

く中庭く

「はあ、つかれた…」

「蓮くん大丈夫?」

「ああ、俺に優しくしてくれるのはかよちゃんだけだよ…」

かよちゃんの膝枕、なんだか落ち着くな…

「さつきは助けられなくてごめんなさい…」

「ああ、良いんだいつもの事… だか… ら…」

「蓮（くん）!？」

「すうすう…」

「…」

「寝ちやつたみたい…」

「全く、ビックリしちやつたじゃない…」

「でも、昼休みはまだあるから今は寝かせてあげない？」

「そうね」

「ふあああく、あれ、寝ちまつてたか… ん？」

蓮が見ると花陽と真姫が寝ていた

「にやははは… 仕方ねえな、おーい起きろ〜♪」

「んん…」

「おはよう真姫」

「!?私、寝ちやって」

「それだったら俺だつて寝ちまつてたしな…」

「…プツッ!」

「ふふふ」

「あははは」

「変な人ね」

「うるさいなあ、それより…」

「…」

花陽は幸せそうな顔で眠っていた

「そろそろ起こすか」

「そうね」

「かよちゃん、起きろ〜」

「ふにゆ?」

「おはよう、かよちゃん」

「………!?れ、蓮くん!?それに、西木野さんまで!」

「なによ… なんか文句でもあるわけ?」

「い、いや…」

「それより、もうそろそろ昼休み終わっちゃうぞ？」

「そうね」

「うん」

「よし、それじゃあ行くか」

「うん♪」

〈教室〉

「全くあなたたちは、いつもいつも…」

「…」

穂乃果達は海未のことを忘れていた事などでたつぷりと説教されていた…

To be continued…

No. 9 「穂むらで会議？」

（放課後）

「ふはああ、やっと終わった〜」

「おい穂乃果お前もしかして居眠りしてたか？」

「ええ!?!そ、そそそそんなことないよお〜?」

「メチャクチャ動揺してんじやねえか、で?どうなんだ?居眠りしたのか?してないのか?どうなんだ」

「う、」

海未にでも聞くか、それが一番早い

「海未、穂乃果は居眠りしてたか？」

「はい、しましたね」

「海未ちゃん!?!そ、そんな…」

やっぱりな…そして穂乃果、そんな落ち込むものか?

「全く、これじゃアテストも…」

「!?!」

ん？どうした？あ、そういうことか…

テストね、さてはこいつ学力テストダメだったな？

「確か入学式の次の日、全学年学力テストか何かなかったか？」

「う…」

「はい、ありましたね」

「なあ、海未」

「なんででしょうか？」

「穂乃果のその時の点数とかって覚えてたりする？」

「覚えてますよ、確か国語68点、英語46点、社会61点、科学53点で確か数学が…」

「ダメエー！」

すごいな、細かい数字まで覚えてるのかよ…

あと穂乃果のことだからめっちゃ危ないと思つてたんだが、意外と点数平均だな、す

こし見直した

そして穂乃果よ暴れるな

「ことり、穂乃果を抑えててくれ」

「う、うん…ごめんね穂乃果ちゃん♪」

「…点」

「え？なんだって？」

「数学、14点…」

「うそ、だろ」

え？マジで？14点ってかなりヤバくない？!

「あ、ああ…」

「穂乃果ちゃん…」

穂乃果は膝から崩れ落ち、ことりはああ、またか、みたいな顔である

「穂乃果、数学苦手か？というか苦手っていうレベルじゃないな」

「うん…あんなものわかるわけがないよ…」

「お前毎回こんな点数か？」

穂乃果は黙って頷く

「赤点常連かよ…それでよく進級出来たな、お前。まあどうせ海未やことりが付きつきりで勉強教えてたんだと思うが…」

「うん、あの時は大変だったね…」

「ええ、穂乃果の家で泊まり込みで教えてましたから、あの時は疲れました…」

「お前らも苦労してんだな、まあ、俺も人の事は言えないがお前程ではないぞ…」

「うう、」

「蓮くんは何が苦手なの？」

「数学」

「え！そんなの!?!それじゃあ穂乃果と「一緒じゃないからな？」だよね…」

流石にこいつと一緒にされては困る

あ、そう言えば放課後って練習するのかな…？いきなりだけど聞いてみるか

「そういえば放課後も練習するのか？」

「いきなりですね…」

「悪いな」

「出来れば放課後も練習がしたいのですが…」

海未は穂乃果を見る

「ええ〜」

「お前本当に学校を救いたいのかよ…」

「だって〜、もう穂乃果疲れちゃったよ…」

「あははは…」

「はあ、それより、気になってたんだがお前ら『曲』はあるのか？」

「曲って？」

「お前らが踊る曲だよ」

「「あ……」」

え？うそでしょ？

「無いのか？」

「考えてなかったね……」

「です……」

「うん……」

「あのさ、お前ら本当に学校救う気あるの？」

「あります」

「うん！」

「あるよ！」

「じゃあどうするよ」

「仕方ない！穂乃果の家で話し合おう！」

〜穂むら〜

「いこいこだよ♪」

あれ？いこいこ穂むらだよな？何？穂乃果の家って穂むらなの？マジか〜

「あれ？蓮くん入らないの？」

「え？あ、うん…入るよ…」

さてと、あいつはいないな…良かった…

「んじやお邪魔しま「ただいま」!?」

なんかすごい聞き覚えのある声が…違うよね？雪穂じゃないよね？だとしたら
「あ!!蓮さん!!」

「…よ、よう雪穂…」

はあ、もういいよ…覚悟は出来た、かかってこい雪穂…

この対雪穂タツクル用に鍛えたこの身体！そう簡単には敗れぬぞ！

「蓮さーん!!!」

「グアツ!!」

な、なんてやつだ…以前より威力が上がっていやがる…

俺の努力はなんだったんだよ

「蓮さん久しぶり！」

「う、うん久しぶり、元気だったか？」

「うん！蓮さんは？」

「うん元氣元氣…そしてかなりビックリしてるよ…まさか穂乃果の家が穂むらだったとはな、そしてお前の姉だったことも含めて脳内ぐつちやくちやだよ。そして何故タツクルの威力が上がっている？」

「ええ!?!つてことは蓮さんがお姉ちゃんを手伝ってくれてる人!?!」

「う、うんそうだね…」

「なーんだそうだったんだね、男の子って聞いてたからてつきり…でもまさか蓮さんだったなんて!?!あと最後のは秘密だよ」

「……………」

秘密って何!?!まさか雪穂毎日殴り合いの喧嘩とかしてないよね!?!蓮さんはすごく心配です!

「あ!?!そうだちよつとお母さん呼んでくる!」

「え、あ、うん…いつてらっしやーい…」

えー、おばさんも来るの〜?

「あ、あの…」

「ん?」

「お二人はどういう関係で?」

「ただの常連客…で、たまに雪穂に勉強やら何やらを教えた…」

「なるほど、だからあんなに仲が良かったんですか…」

「うん、仲がいいというか…「蓮さーん!!」来た…」

「お母さんに蓮さん来てること伝えてきたよー!」

「蓮くーん!!」

雪穂と穂乃果の母が走ってきた

元気だなあ、つて! 感心してる場合かつ!

うーん、どうしようか…

「あ、どうもおおばさんお久しぶりです」

「久しぶりね! あら? また背伸びた?」

「まあ、はい…」

「この前のライブ行ったわよ! 相変わらずカツコいいわね!」

いつも思うけど店の仕事は大丈夫なのか…?

「ど、どうもありがとうございます…」

「あ、そういえば何で蓮くんが?」

「えーつと「蓮さんがお姉ちゃんの言ってた手伝ってくれてる人だったんだよ!!」…そう

いうわけです、はい」

あーホントに穂乃果と姉妹だつてことがよくわかるね

「そうだったの!? あ、海未ちゃん!」

「ど、どうも…」

今!? 今気づいたの!? おかげで海未の表情がどんどん暗くなっていくよ!

「穂乃果なら二階よ、後でお菓子持っていくからゆつくりしていつてね♪」

「はい、あとお菓子は大丈夫です、今ダイエット中なので」

なるほど、多分スクールアイドルとして体重管理をしっかりとすることか、流石海未。だが穂乃果が心配だ

「あらそうなの!? それじゃあゆつくりしていつてね♪」

「それじゃあ俺も…」

ガシッ! 何かに掴まれた、振り向くと雪穂が目をキラキラさせ、蓮を見ていた

「蓮さん! 私ギター上手くなったの!」

「わ、わかった、でも俺は…」

「やったあ! 良いよねお母さん!」

「ええ、お母さんレジやっておくから」

人の話を聞けえええ!! なんなのこの親子! 俺には拒否権というものはないのでしょうか!? あと人の話は最後まで聞きなさい!! まあ、雪穂がどれだけ上達したか気になるし、まあいいや…

「じゃあ行くか…」

「うん♪」

く穂むら 二階く

「後で行くから…」

「なんか、すごく申し訳無い…」

「わかりました…」

「そ、それじゃあ…って！雪穂そんなに引つ張るなあ！」

「バタン！」

「…」

大丈夫でしょうか…まあ後で来ると行っていたので大丈夫でしょう…

「穂乃果、ことり、入りますよ…」

海未が扉を開けるとそこにはお饅頭やらお団子やらを食べている穂乃果とことりの姿があった…

「あ、海未ちゃん♪」

「海未ちゃんも食べる？」

「あなた達、」

「？」「」

「ダイエットはどうしたのですか？」

「あー！」

あー！じゃないですよ、ダイエットすると言ったのに、穂乃果はともかく。ことり、あなただまで…

「はあ、」

「そういえば蓮くんは？ことりちゃん、一緒に来たんじゃないの？」

「うん、来たよ？海未ちゃん、蓮くんは？」

「蓮くんなら雪穂さんの部屋です」

「え？」

「なんでなんで!？」

「知りません！後で来ると言っていたので話し合いを…」

「よし！ことりちゃん、見に行こう！」

え？なぜそうなるのですか…

ことり、穂乃果の誘いに乗らず、止めてくださいよ？

「うん♪」

ことり、あなただまで…

なぜあなたはそうやって穂乃果を甘やかすのですか…

「いけません、私達は踊る曲について話し合いに来たのですからそのようなことに時間を無駄にするわけには……」

「雪穂く入るよ〜」

「つて穂乃果！まだ話は……」

「あ！蓮くんまたギター弾くの!?!」

「えっ?」

れ、蓮のギターですか？ちよつと聴いてみたい……

いや、ダメです！きちんと話し合わなければ……

ですが、蓮のギターなんてあまり聴けませんし……

ああ、どうすればッ！

海未が迷っていると……

「海未ちゃん！始まるよ〜♪」

「え？あ、ちよつ、ちよつと待つてくださあああい!?!」

ドンッ!!

鈍い音が鳴り響いた

「!?!」

四人が開かれた扉からひよつこりと顔だけを出し、廊下を見る

そこには廊下とキスしてる海未の姿があった

「大丈夫かー？」

「痛い、です」

「…はあ、何してんだか」

「海未ちゃん大丈夫？」

「え、ええ大丈夫ですことり。ありがとうございます」

「さあ、一緒に蓮くんのギター聴こ♪」

「は、はい」

蓮君のギターを聴くのは初めてなので少し緊張してしまいます…

「雪穂、チューナーある？」

「あるよ、はい、蓮さん」

「ん、ありがとう」

そういつて蓮は雪穂からチューナーを受け取りギターのチューニングをした

「ありがとう雪穂、はい」

「うん」

雪穂に礼を言いチューナーを渡すと、蓮は深く、深呼吸した

「ふう…」

「ッ!？」

蓮の表情が変わった

さつきまでではやる気のなさそうな気の抜けた顔だったが今は違う、真剣な表情でピツクを持った

穂乃果やことり、雪穂は慣れているようだったが、初めて蓮の真剣な表情を見て海未は息を飲む

本当に蓮なのだろうか。さつきまでとは違う、今の蓮の顔は真剣さそのものだ

「Music start…」

音楽が流れ始めた

最初はベースから始まり、ボーカルが入ってきた

ドラムが流れるのと同時に蓮は弾き始めた

「♪」

なんて美しい音色なのでしょう…

心に響いてきます

それにギターを弾いている時の蓮君はすごく楽しそうです。本当にギターが好きなのですね

演奏が終わった

「ふう、どうだった？」

「いつも通りすごかったよ！でも、途中で音が外れてた気がしたけどやっぱり蓮さんはカッコ良すぎるよ!!」

「やっぱりか、ありがとう雪穂、穂乃果達はどうだった？」

「うん！やっぱり蓮くんはすごかったよ！」

「私も、すごくカッコいいって思ったよ♪」

「そ、そうかありがとう」

「海未ちゃんもカッコいいと思ったよね?！」

「え!?あ、はいそうですね」

「えー、それだけー？海未ちゃんつまんないのー」

「…」

「や、やめとけ穂乃果、また説教くらうぞ」

「!?あ、そ、そうだねーあははは」

「ねえ、蓮くん」

「ん？なんだ？」

「蓮くんのギターっていくらくらいするの？」

「それ聴いちやうの?!」

「だってゝ気になるしゝ」

「まあゝ穂乃果も気になる…ね。ねえ蓮くん!いくらなの!？」

「やめといたほうがいいよ」

「「え?なんで?！」」

「聞いたらきつと驚きすぎて腰抜かすから、私も最初聞いたときすごいビックリしたから」

「あはははゝ確かに最初穂に教えたときすごいビックリしたもんな」

「うん、だからやめといたほうがいいよ」

「うーん、じゃあ仕方ない!代わりに蓮くんのギターって何て言うギターなの?！」

「ESPっていうメーカーのM—II—c u s t o m ってやつだよ」

「へえーなんかすごそうだな名前だねえー」

ふと海未を見ると、何やらスマホで何かを調べ始めたようだ

「!？」

ん?どうした?そんなに震えて…

「どうしたの?海未ちゃん?」

ことりが心配そうに聞くと

海未は震えた声で答えた

「ただだ大丈夫ですよよよ。ここ、ことり」

「大丈夫じゃないよね!?!」

「もしかして、調べたな?」

「え? 調べたって?」

「ちよつと海未ちゃんスマホ見せて♪」

そう言うところには海未のスマホを見た

するとところも海未と同じように震え始めた

「ほ、ほ穂乃果ちゃん…ここ、これ…」

「ん? どうしたの? えーつとく? いちじゆうひやくせんまん…」

穂乃果は震えるどころか顔を真っ青になっていった…

「だから知らない方が良いつて言ったのに…」

「だ、だつてここまで高いとは思ってなかったんだもん」

「ま、まさかギター1本約40万もするとは思いませんでした…」

「は、はひい…」

あーあ、ことりが腰抜かしちゃったよ…

「あ、でも俺のバンドリコラボの sayo custom だから確か60万くらいだったと思うぞ」

「「ひええ……」」

何故こんなに高くなったかというところM—II sayo customはバンドリコラボで Roselia の紗夜が持つてるギターなんだ。だが、なぜESPがこんなに高いのかはギターのブランドってこと以外知らん

それにしても…

ちよつとやり過ぎたかw

「ま、そういうことだ！」

「どういうことですか！」

「それよりも今日の本来の目的は曲についての話し合いだったよな？」

「あー！」

「いや、あーじゃないよね？本当にやる気あるの？学校救う気あるの？」

「あるー！」

「じゃあさっさと穂乃果の部屋行くぞ」

「はいい」

「つつう訳で雪穂、ちゃんと勉強しろよ？」

「ええー」

「穂乃果みたいになってもいいのか？」

「え、ちよつと蓮くんそれどういこと!？」

「あ、それは嫌だ」

「雪穂まで!?!二人とも酷くない?雪穂に関しては私お姉ちゃんだよ!？」

「だからだよ」

「え、ええ、え、え、え!?!」

「んじや穂乃果の部屋に行くぞ…つと言いたいところだが」

時計を見るともう19:00時だった

「7時になったから俺は帰る」

「ええー、蓮くん帰っちゃうの?」

「悪いなことり、凜ねえの飯作らないといけないから」

「本当に何度も聴くけど弟なんだよね?」

「ああ、弟だ。残念ながら」

「もうどつちがどつちかわからなくなってきたよ…」

「うん、双子つて大変だと思うよ…」

「多分俺たちだけだろうよ…」

「「大変だね（ですね）…」」

「やめてくれ、悲しくなる…あとそれを言うなら穂乃果、お前もだぞ」

「ふえ？」

「雪穂、ドンマイ…」

蓮がそう言うのと雪穂は何も言わずに深く頷いた

「それじゃ、俺は帰るから。海未、あとよろしく」

「はい、わかりました。と言いたいんですがそろそろ私も帰らなければいけないのでこれ…」

「じゃあね♪蓮くん、海未ちゃん♪」

「また明日な」

「穂乃果、ちゃんと寝るのですよ？」

「わ、わかってるよ」

「明日の朝5時半に迎えに来ますからちゃんと起きてくださいいね」

「う、うう」

「わかりましたか？」

「は、はい…」

「お前は穂乃果の保護者か…」

「あははは…」

「ま、いいや。それじゃあな」

「うん！ばいばい！」

帰る前に和菓子でも買っていくか…

家に帰った俺は凜ねえが家にあるカップラーメンやらなんやらをほとんど食いつくしていたので説教したが開始10分くらいでぐっすりと寝やがったので起こして嫌いな魚を無理矢理食わせた…

翌日

言うまでもないが、穂乃果は朝練に遅刻した

く放課後く

「はあ、やっと終わった…」

く穂むらく

「よし！それじゃあ話し合おう！」

「つて、展開早くない？」「尺が押してるんです」ちよ、メタ発言ダメ」

「それよりも」

「無視かーい！」

「これを見てください」

「[?」

海未は蓮たちにある映像を見せた

「これって、この前のA—R—I—S—Eのライブじゃないか」

「そうです」

「それで、これがどうしたの??？」

「穂乃果、腕立て伏せでできますか？」

「うん、出来るよ…っ！」

海未に言われ、穂乃果は腕立て伏せをした

「それで笑ってみてください」

「ん、んはあ!!無理だあ！」

穂乃果は頑張ったが、無理だったようだ

「ふうく、これ思ったより難しいよ〜」

「ダメですね。部活をやっている私ならともかく、やっていない穂乃果とことりはもつと体力を付けなければいけません。」

ん？海未って部活やってたのか？初めて知った…

何部だろう…？

「海未って部活は何してるんだ？」

「弓道部です」

「へえー」

ん、まてよ？ということは弓道部にも行きながら活動してるってことだよな？そう考
えると海未ってすごいな

あ、だからゴリラなのか：

「とにかく、今までの練習でも体力はつきますが、今日はもつとちゃんとした練習メ
ニューを作ってきました。そして蓮は後で殺します」

ちよつとおお！今女の子から発せられちゃいけない言葉が出てきたんだけどお！作
者あーやめんか！

「これを」

そう言つて海未は練習メニューが書かれた紙を俺達に配った

「んーと、朝は階段3往復、背筋20回×5回、腕立て10回×5回、軽いステップの練
習：つて！朝からこんなハードなのかよ、しかも毎日：死ぬぞ？」

「それでしようか」

海未はきよんとした顔で蓮を見ている

「いや、何？その『え？普通でしょ？』みたいな顔。言っておくが海未よ、このメニュー

は常人にはマジできついぞ、あ、だからゴリィ「ふん！」ゴブオー！」

「今回も綺麗に決まりました、って、何さっきから団子食べてるんですか！」

穂乃果の方を見ると、穂乃果とことりが美味しそうに団子を食べていた。海未よ、なに人殴って満足しちゃってるの？

「だってそこに団子があるから」

いや、何登山家みたいにそこに山があるからみたいなき感じで言っちゃってるの？

「なんですか、その登山家のような理由は」

海未も同じこと思ってたのかよ

「それで、ダイエツトはどうしたのですか？」

「あー！」

「ほんとにやる気あるの（ですか）？」

台詞被っちゃったよ…

「あるよー！」

「でもダイエツトは明日からでいいよね笑笑」

「うん♪だってもう食べちゃってるし、残すの勿体無いしく♪」

そういつて二人はまた団子を食べ始めた

仕方ない…あれをやるか

「いいんだな？」

「え？」

「いいんだな？食べてて、明日明日ってやってたらぶくぶく太るぞ？それでも良いんだな？」

「うん♪だつてその分動けば良いんだから♪」

あらま！なんて斬新な考え方なこと。じゃねえよ、普通の女の子なら食べなくなるぞ？あ、ことりさんは普通に食べるのやめたね。うん…

「あ、蓮くんも食べる？」

穂乃果が食べさせようとしてきた

「はむっ、あ、美味しい…じゃねえんだよ！」

穂乃果が団子を口の前まで持つてきたのでそのまま食べたが、周りから見るとこれ完全にあーん、パクツの状態だよね？穂乃果は気にしてないみたいだけど、

あ、ことりと海未顔真つ赤だ

「ほ、穂乃果…」

「穂乃果ちゃん…」

「ん？なーに？」

「ま、いいや。いつも通り美味しかったし…あ、そういえばお前ら」

「何（ですか）？」

「曲はともかく作詞はどうするんだ？」

「それなら♪」

穂乃果とことりは揃って海未の方を見る

「なんですか…」

「海未ちゃん中学の頃ポエム書いてたよね？」

「え…」

「ぶふッ!!」

う、海未が、あの海未がポエム…

や、やべえ、腹筋破壊力抜群だわ

「なに笑っているのですか？」

「い、いえなにも！」

今海未からマジものの殺意感じたぞおい

「ねえ！海未ちゃんお願い！」

「いやなものは嫌です！あれは私にとって黒歴史だから嫌です！」

自分で黒歴史って言っちゃったよ…

「黒歴史は掘り返してなんぼだよ！」

はい穂乃果からすごい発言しました！

悪魔の子かな？普通そんなこと言わないよ？

隠すべきものを掘り返してなんぼって、悪魔だな…

「つて蓮くんが！」

「おいしい！何俺に振っちゃってんの!?」「覚悟はよろしいですね?」「いやいやまってまて

まて！俺じゃないよ!?言つてないよ、俺そんなこと！」

「3秒内に答えなさい良いですね?」

「いやまってそんなの無理だよね!?第一俺やってないーち!」2と3はあ!?!ぶぶああ

!!」

海末の右ストレートが蓮の腹部に直撃した

「蓮くん、大丈夫?」

「あ、ああ、だい、じょうぶだ、こ、とり、」

「蓮くん、息できてないよ…穂乃果ちゃん」

「うん！わかつたこういうときは、つと…呼んだよ♪じゃあ話し進めよつか」

「だね♪」

え?誰呼んだの?すっげえ気になるんだけど…

「大丈夫だよ！後でわかるから」

「さらつと心を読むな」

ふう、なんとか少し回復したけどやっぱりまだダメージがすごいな、ゴリラかよ全く……誰かベホマかけてくれ……

「ベギラマならいいですよ？」

「だからさらつと心を読むんじやありません、というかその読心術どこで会得したの？教えてくれない？それと海未さん、それは攻撃魔法ですよ？殺す気ですか？」

「つと、茶番はここまでにして……海未ちゃんお願い！」

つて！無視かい！

「嫌です」

「じゃあ誰がやるの？」

「そんなものは「海未ちゃん」はい、なんですか？」

「穂乃果ちゃんが書けると思う？」

「……」

あれ？なんか海未が黙っちゃったよ？え、そんなに悪いの？

『はい回想シーン入りまーす！』

なんかスタツフ的な人出てきたけど大丈夫なの？

小学生穂乃果「おまんじゅう、うぐいすだんご、もう飽きた」

「…」

「なんか一瞬回想入ったし、入り方が色々おかしい気がしたけどーっただけ言わせてもらっていい？穂乃果って昔から穂乃果なんだな」

「うん…」

「とうわけでお願い！海未ちゃん！」

「嫌なものは嫌です！」

ぐぬぬぬ、強いな、ここまで言っても嫌だ嫌だの一点張りとは…

「海未ちゃん…」

なんだ、そのポーズというか構えは？何する気なの？ことりさん???

「おねがぁい！」

「ッ!?!」

「もう、ことりはずるいです」

「やったー♪」

「…ハッ！な、なんだったんだ、今のは…」

「やったよ！ことりちゃん、蓮くん！」

「ん？あ、ああ良かったな…ところでさつき呼んだ人って誰だ？」

「ああそれはね『ピロン♪』あ、来たみたい！」

そういつて穂乃果は部屋を飛び出して行った…

と、思ったらまた帰ってきた、今度は誰かを連れて…

「はいい♪どうもー！Ended timeのベースボーカル、渡部いつきちちゃんですー！」

ナゼコイツガキタ？

「帰れ」

「酷い!?!」

「お前はGGO編担当だろうが、帰れ。そしてなぜ穂乃果がお前を知っていて、連絡先まで知ってるんだ？」

「メタいよ蓮くん、そしてなぜ高坂先輩が私の連絡先を知っているのかというと…」

く回想シー「やめろお前の回想なんて見たくない」

「ちよっ!?!酷くない？私バンドメンバーだよ!?!GGO編では同じチームだよ!?!」

「うるさい」

「んぐっ!?!ゴクツゴクツ…」

蓮はいつきに何かを飲ませた

「そ、それは…」

ことりはその何かに見覚えがあるのか、顔を真っ青にして怯えだした

そして…

「お、全部飲んだか…すげえ〜」

「…バタン！」

「いつきちゃん!?!」

「まあ、全部飲んだらそうなるわな」

「いつきちゃん!?!大丈夫!?!」

「で、出落ちは、いや、だった、ガクツ」

「いやどんな遺言!?!」

「いつきちゃん!?!」

「やっぱすげえなこのソース」

蓮がいつきに飲ませたもの、それは!

ス
1滴で喉が腫れるように痛くなり、スプーン一杯で常人をノックアウトする死のソース

『デスソース』なのだ!

「解説ご苦労様」

はいはい♪

「というわけだ。さて、続いて「え、続けるの!?!」曲の方だ」

「蓮、作曲は誰が？」

「ああ、それには心当たりがある。うちのクラスの「真姫ちゃんだよ！」おい」

「まあそういうことだ」

「ですが、断られたんですよね？」

「うん、今日行つてお願いしたら断られたよ」

「え？今日行つたの？いつ、教えて？」

「作者さんがめんどくさそうだから言わない」

「おいしいいい！何メタ発言しちやつてるの!?!?そして頑張れよ作者ああ！」

「話が進まないの蓮は少し黙っててください」

「ええ……」

「それでね、明日また行こうと思うの。だからね」

「わかりました、歌詞の方はなんとかします。ですね？蓮」

「うん、つて、俺もやるのかよ！穂乃果はもう一回行くんだろ？しかも明日！眠れねえ

よ、だから断る！」

「蓮くん、おねがぁい！」

「よつしやあやつてやらあ！」

ちくしょう！あれには逆らえねえ……今日は眠れねえな

魔剤が必要だな、どれくらい用意しようか…

まあ多分徹夜するから5、6本は必要だな、それと夜食も

ああ、論吉さんが飛んで行く…

「うん！さつすがことりちゃん♪」

「それじゃあお願いね♪海未ちゃん、蓮くん！」

「はい！」

「おうよ！」

「それと、蓮くん、まだ起きないよ、いつきちゃん…」

「まあ、1本全部飲んだからな。死んだか？」

「え、ちよ、ちよつと蓮くん!?嫌だよ?穂乃果の部屋が事故物件になるのは…」

「冗談だよ冗談」

「冗談に聴こえないよ…」

「さてと、起こすか」

「どうやって?」

「こうやるんだよ。『希さん…』」

「ワシワシだけはやめてえ!!あれ?ここは?」

「なぜ今ので起きるのか、疑問なのですが…」

「こいつも希さんのワシワシの被害者なんだよ」

「ワシワシ？」

「ほら、この前お前がが神田明神でやられたやつ」

穂乃果に思い出させるように言うと、穂乃果は真っ青になった

「た、確かにあれは、ね」

「はい…」

「まあ、いいや。いつきも起きたことだし、解散するか」

「そうですね」

「あ、あのー？私が来た意味って一体」

「ほら、帰るぞバカ」

「引つ張らないでくれる？それとさりげなく罵倒するのやめて…」

「あ、そういえばこの前今度UTXでライブするって蓮くん言ってたよね？」

「え？そうなの蓮くん?! いつ呼ばれたの？私聞いてないよ」

「あくそういえばまだお前らに言ってなかったな、今度の新入生歓迎会だっけ？その前

日

「つてことは、後2週間も残されてないじゃん！なんで早く言わなかったの!?!」

「だつてお前ら俺置いて遊びに行っちゃうんだもん」

「置いて行つてごめんなさい」

綺麗な土下座だなく

一回飛んでそれから土下座つてすごいな

あれか、属に言うジャンピング土下座つてやつか

「まあいいや、ということだからあいつらにも伝えてくれ」

「はいはい」

「んじゃ、俺は帰る。海未、また後でな」

「はい」

「んじゃ、またなく。」

「じゃあ私も失礼しまーす、さようなら〜」

「うん、ばいばい!」

「気をつけてね♪」

そうして俺達は帰った、蓮は海未と通話しながら歌詞を考え、二人とも徹夜した

No. 9. 5 「曲」

はーい、前回のあらすじ

前回は、新入生歓迎会があと2週間に迫る頃、まだ曲が無かった蓮達は穂乃果の家で会議をすることに。

蓮がことりと海未に案内された場所はなんと蓮がよく和菓子を買っていた穂むらだった。穂乃果の家が穂むらだということ、雪穂が穂乃果の妹ということに驚きを隠せない蓮だった。

会議では、作詞を誰がやるかと話し合い、作詞は海未と俺がやることに…

穂乃果は作曲が出来ると思われる西木野さんにもう一度頼んでみると言い、俺と海未は徹夜で歌詞を完成させた

そして次の日

ピンポーン♪

この日の俺の朝は家のインターホンから始まった

「ZZZZ」

ピーンポーン♪

「Z z z…」

ピーンポーン♪ピンポン♪ピンポン♪ピンポーン♪

ジリリリリリリリリリリ（目覚まし時計）

ブチツ「うるせえ!!もう起きとるわ!!」

蓮は目覚まし時計を物理で止め、玄関の方へ向かった

ったく、なんなんだよ朝っぱらから

なんでこんな4時に目覚まし時計が鳴るんだよ。

少しは寝かせろ

ったく、文句言つてやる…

何やら布団に違和感があったが、蓮は目の前の問題を解決するため、玄関へと向かっ

た

ピーンポーン♪

ブチツ「はいはい、今開けまーす。ついでにあの世への扉も開けますね」

ガチャ

「おはよう蓮くん!」

ボタン

俺は即座に玄関の扉を閉めた

だって仕方ないよね文句いってやろうと玄関開けたら制服姿の穂乃果がいたんだから

ピンポンピンポーン♪

「…」

『ちよつと蓮くん!?!』

ドンドンドンドンドンドン!

ガチャ

「うるせえ近所迷惑だ、今何時だと思ってるんだ。」

「なら無視しないでよ…って、蓮くん頭に何付けてるの?」

「ん?」

穂乃果に言われ自分の頭を探ってそれを掴む。すると

「なんだこれ?」

「蓮くんそれって、」

よく見てみるとそれはパンツだった、しかも女物の。

まあ分かりやすく言うとなんてパン〇イだ

「なんでこんなものが俺の頭に、?」

「蓮くんってやつぱり変態だったの？」

「いや違うから、俺もなんでこんなものが頭にあるのかわからない。てかやつぱりって
どういうことだおら」

「まあとりあえずことりちゃん達が来る前に…」

穂乃果が言い終わる前に蓮は気付いた、穂乃果の後ろに忍び寄る影の存在に。

まだ辺りは薄暗く、アッシュ色の髪がほんのり見えるくらいだった。蓮はその髪の色
で誰なのかわかっていた。

「ほくのくかちゃん♪」

「あ、ことりちゃんおはよう♪」

「おはよう♪」

何度聴いてもことりの声ってすごい甘ったるいよな

脳が溶けそうだ…

「蓮くんもおはよう♪」

「ん？あ、おはよう…」

まずい、これ隠さねえと

「何隠したの？蓮くん」

「何も隠してないぞ？」

「怪しい…」

「な、何も怪しくないぞ?」

「うーん、何もないならいいや」

ふう、危なかった…

「つて思わせてーの♪」

「ダニイ?!」

「えーい!」

「あ!!!」

「ゲーツト♪つてこれ…」

あー、ことりの表情がどんどん暗くなっていくよ

使… さつきまであんなにニコニコしてたのに、冷めた目で俺を見る。さらば、俺の心の天

「蓮くんも男の子なんだね…」

「いや、あの、それは…」

「はい…」

ことりは。パン〇イを綺麗に折り畳み、返した

「ことり、違うんだよ。あのな」

「ことりちゃん、蓮くんは今、大人の道を歩もうとしているんだよ。」
「そうなの？」

「おいしい!! 穂乃果お前何言ってるの!?! うわ、すっげえ腹立つその顔。
穂乃果はやってやったぜ的な顔で蓮を見ながら

そつとピースした

「こいつ、後で覚えてろよ…」

蓮は呟いた…

「呟いたじゃねえよ、くそ作者!!」

「?」

「なんでもない」

「それで、なんで蓮くんはそんなものを持っているの?」

「俺にもわからない。気づいたら頭に付いてた」

「ええ…」

「そういえば海未は?」

「まだ寝てるんじゃないかな?」

「昨日あいつ頑張ってたからな」

昨日海未と俺は電話等で作詞をしていた。気づいたら夜遅くなっていた、海未はギリギリげふんげふん女の子だ。徹夜でも大丈夫って言ってたけど流石にそうはいかないので、歌詞ノートがあるみたいだから受け取りに行き、それをあとは俺がまとめ、海未には寝てもらった。

因みに犠牲になつた魔剤の本数は3本だった。

後はメ○シヤキやら、そのガムやらで乗り切った。

夜食にはカ○リーメイトや、カップラーメンが犠牲になつたが、ラーメンの方は匂いに釣られてか凜ねえが起きて俺がふと目を離れた隙に喰らつて去つていった。なので俺の夜食はカロリーメイト(チーズ味)と凜が嫌いなシーフードラーメンだけとなった。まあ旨いからいいんだけどね。

「とりあえず迷惑だから入れ」

そこそこ時間が経つたとはいえまだ4時半だ、玄関前でわいわいやつてると近所の迷惑だ。

「お邪魔しまーす♪」

「ところでお前ら朝ご飯食べたか？」

「穂乃果は食べてないよ」

「(ハ)とりは？」

「穂乃果ちゃんに呼ばれて急いで来たから…」

なるほどね、仕方ない作るか…

まあ穂乃果がこんな時間に来たときから作ろうとは思ってただけどね

「お前ら嫌いなものあるか？」

「ピーマン！」

子供か。

「私にはんにくかな」

あーね、にんにくは食べると口臭きついからな

旨いんだけどな

えーつと、何があったかな〜♪

玉子はあるな、野菜はレタス、玉ねぎ、トマトか…

そういうばまだマグロの切り身があつたような…

「お！あつたこれこれ」

この前食べようと思つて買つてきたんだよな〜♪

忘れてたけど…

「れーんくん♪」

「ごとり、どうしたんだ？」

「お手伝いしようと思ってね♪何か手伝うことない？」

「うーん、手伝うことか…ことり、その下の柵開けてくれ」

「うん」

「何がある？」

「パンがあるよ、というかそれしか入ってないよ」

「サンドイッチにするか。ことり、もういいよありがとう」

「え、もう終わり？」

「それじゃあ後で手伝ってもらってからそれまで待機しててくれ」

「はーい♪」

「蓮くん蓮くん何してるの？」

「穂乃果か、危ないぞ」

「ねえねえ蓮くん」

「なんだ？」

「蓮くんが料理するところ見せて〜♪」

「ことりも見たいな♪蓮くんのお料理」

「危ないから離れてろ」

「ねえねえおねがーい」

「…はあ、わかったよ」

火傷しないか心配だな…特に穂乃果は

「油が跳ねるからあまり近づくなよ」

「わかつてるよ!」

コイツ本当に分かかってるのか?

「温まつてきたな」

ここでマグロの切り身を解いた玉子に浸ける、そしてパン粉でまぶす。パン粉で揚げた方がカリッと仕上がるからな。

次は油が飛び散らないように静かに入れる。

チリチリと音が変わったら油を切つて皿に移す

「以上!」

「おおう」

「そしてこれをレタス、玉ねぎ、トマトとパンに挟んだら完成だ」

「美味しそう…」

「蓮くんつて料理も出来たんだね」

「まあな、それじゃ冷めない内に食えよ」

「いいただきまーす♪」

ザクッ

「ん〜美味しい〜♪」

「サクサク〜♪」

「だろ？ かしもあるぞ、物足りなかつたらつけてくれ」

「モグモグ…」

「聞いてねえな」

「あははは…」

揚げ物とはいえ朝からマグロとは贅沢な朝ごはんだな。

切り身って言っても元は本マグロだぞ。そういえばクーラーボックスにまだ親が持ってきたのが一匹あつたな。

「さてと」

「蓮くんどこに行くの？」

「部屋」

そういつて蓮はリビングから出ていった

「ふう〜美味しかった、ごちそうさま〜」

「うん、蓮くんが料理上手だったなんて意外だよね」

「そういえば蓮くんどこ行ったの？」

「なんか、部屋に行くって出ていったよ？」

「へえー、後でちよつと行ってみよう！」

「すうーすうー」

「……」

またか、また俺のベッドで寝てるのか

今俺のベッドで花陽が寝てる

なんで花陽がいるのかというと昨日帰ったら両親が用事で家におらず、テーブルに書き置きと手紙が置いてあったのだそう。書き置きでは『今日と明日は家にいません、なので蓮君達の家にも泊まってください』と書かれて、手紙の方は俺宛に書かれた物で、『蓮君、花陽が可愛いからって手出しちやだめよ？まあ私としては早く孫の顔が見たいからいいけど。まあそういうことなので今日と明日花陽がお世話になります by 花陽ママより』と書かれていた。俺はこの手紙を読み「誰が手出すかアア!!」と勢いよく破った。

「おーいききろー起きてくれー」

「むにゆ、えへへー」

まったく、幸せそうに寝てるな…

ちよつと突つついてみるか

「ん、んにゅふう〜」

か、「可愛い…なんだこの可愛い生き物は

ん〜」

こ、これは癖になる…

でもそろそろ止めておこう

「かよちゃん起きてくれ〜」

「すうーすうー」

「おーい」

花陽を揺さぶりながら起こす

「すうーすうー」

もしかしてコイツ

「起きないとないと朝ごはん抜くぞ」

「それはダメええ！」

ゴン！

「う”ッ…」

花陽が勢いよく体を起こし、蓮の顔面に花陽の頭が激突した。

「いたた…蓮くん大丈夫?!」

「や、やっぱり起きていたか。また俺のベッドで寝てるし」

鼻血を出しながら言う俺

「えへへ、蓮くんの布団って何か寝心地が良くて…。」

にやけた顔で言う花陽

「蓮くん鼻血大丈夫?」

「大丈夫…ではないな、かよちゃんそこにティッシュあるから取ってくれ」

「はい」

「ありがとう。それで、いつから俺のベッドで寝てた?」

「最初からいたよ?」

ん?今なんつった?

「最初ってどこから?」

「蓮くんが目覚まし時計殴って停めた時から」

あーそういえば起きたときなんか布団に違和感あつたなく、その時からいたのか
。って!

「俺が寝てるときにお前もおつたんかい!え?いつ来たの?ねえ、いつから寝てた?」

「蓮くんが机に向かつて何かしてたときにこそっと」

「…」

俺が寝る前からスタンバってたの？全然気付かなかったんですけど。まあ布団入ったときに良い匂いがするとは思ってたけどまさかそこに人が寝てたなんて思わないよね

「もういいや、寝る」

「おやすみなさ〜い」

そういつて花陽は蓮の布団の中に入った

「いや、何当たり前のように入ってきてんだ。帰れ！」

「いーやー！」

蓮はベッドから出て、花陽から布団を剥がそうとした。だが、花陽は蓮に抱きつき、抵抗した

「抱きつかないでくれる？」

「蓮くん寝てるときに私に抱きついてたよ？」

「え、マジで？」

「うん、可愛かった♪」

とりあえずかよちゃんを俺から引き剥がす

「かよちゃん、可愛いはやめてくれ。まあ確かに凜ねえと同じ顔でそう思うのは分かる、

でも出来れば言わないでくれない?」

「顔だけじゃないんだよね」

「何? 小さくて可愛いってか、うるせえよ。もういいや、ご飯食べよ」

「蓮くん」

「…全く、ホント甘えん坊だな」

また花陽が蓮を抱きしめる。でも今度は甘えている感じではなく、まるで蓮を慰めているかのよう

「蓮くん無理しなくて良いんだよ?」

「…」

「前みたいに「かよちゃん」っ…!」

「俺は別に無理してないし、平気だ」

「蓮くん…」

「かよちゃんのそういうところ俺は好きだよ。」

「!?!蓮くん…」

「さ、ご飯食べよ」

今の蓮くんのあの目、あの時と同じ…やっぱりまだ

「かよちゃん?」

「え？あ、うん」

花陽が部屋から出ようとしたとき

「…ちよつと待って」

蓮に呼び止められた。蓮はドアに近づくと思いつきりドアを開けた、何かにぶつかったように鈍い音がした

「いったああ！」

「やっぱいいやがったか穂乃果！」

「大丈夫？穂乃果ちゃん」

「え、ええ？何でいるんですか？あ、もしかしてさっきのインターフォン…」

「そう、こいつだ。」

「こいつって言わないでよ、ちゃんと穂乃果っていう名前があるんだから」

「うるせえよ、どうせ盗み聞きしてたんだからいいだろ」

「ギクツ！」

花陽はさつき自分が言ったことが聞かれていたと思うとすごく恥ずかしくなった

♪ ピーンポーン♪

「海未呼んだ？」

♪ うん♪」

「人の家に勝手に呼ぶなよ」

「海未ちゃん入ってきて良いよー♪」

「ことりもことりで何勝手に入れてるんですかね？」

『お邪魔します』

「二階にいるよー」

「呼ぶな、そしてリビングに戻れ」

「えー」

「い い な？」

「は、はいー！」

よし、これで良い

『穂乃果、ことり？どうしたのですか？ちよ、ちよつと引つ張らないでください！』

「俺達も行くか」

「う、うん」

朝飯を食べ終わり、時間も時間なのでかよちゃんに凜ねえを任せ、俺達は朝練に行つた

「…これで今日は終わりましたよか」

「ふう、疲れた〜」

「はあ、はあ、何で俺だけ量が多いんだ、ハードすぎるわ…」

蓮は死にそうであった

「何となくです」

「なんで何となくでこんなにキツいんだよ」

「蓮くん大丈夫？はい」

「かろうじて生きてます。あ、ありがとう」

「ことりは蓮にタオルとポカ리를渡した

「あ、海未」

「はい、なんででしょう？」

「こんな感じで良かったか？」

そういつて蓮は海未に昨日預かったノートを渡し、海未はノートに書かれている歌詞を見た

「はい！ありがとうございます、蓮」

「それじゃ続きやるか」

「はい」

そして放課後

「西木野さん作ってくれるかなー？」

「うーん、どうだろう？」

「まあやれることはやったんだ、結果を待つしかない」

「そうですね。でも、ただ結果を待つのではなく、本番へ向けて練習あるのみです」

「そうだな」

今日、昼休みに穂乃果達が俺のクラスに来了。理由は勿論、真姫に作曲を頼むためだ。

だが、作曲を頼むや否や断られた。即答で

「お願い、曲を作つて欲しいの！」

「お断りします」

こんな感じだ。だが穂乃果は諦めず、放課後、音楽室に行ったのだそう。

けどその時もお断りしますの一点張り、それでも穂乃果は諦めずに頼み込んでいた。穂乃果は「今日も神田明神で練習するから来て」と言い、真姫に歌詞を渡して帰った。

「ねえねえ蓮くん♪」

「なんだ？」

「たまには蓮くんが監督してくれないかな？」

「こ、ことり…そんなことしたら蓮が迷惑なのでは？」

「別にいいぞ」

「え？良いのですか？」

「ああ、たまには俺がやってもいいだろ」

「やった〜♪今日は蓮くんが監督するんだね」

「やったね！蓮くんは海未ちゃんと違って優しそうだからそこまでキツくないはずだよ」
♪

おい、一体お前らは海未をどう思ってるんだ？特にことりは酷いぞ、さりげなく海未を蔑むような発言はやめなさい。ほら、海未が泣きそうだぞ。

まあ良い、今日はこいつらを徹底的に鍛え上げてやるのだからな

「それじゃ始めるぞ」

「はーい♪」

「あ、ひとつ忠告〜」

「?」

「俺は甘くねえぞ、死ぬ気でついてこい」

「・・・」

「大丈夫なんでしょうか、？」

この時、穂乃果とことりはやってしまったかもしれないと深く、後悔したしぼらくして、

「ひいっ…ひいっ…」

「海未ちゃんの時よりも、キツイ、」

「おい、さつさと立て」

「ひい!!」

「もうこれでは練習ではなく訓練ですね…」

海未のしている状況は、よく映画であるアメリカの軍隊の訓練のようで、穂乃果達から見ると、蓮は軍曹の様であった

「おい穂乃果アア! なんの真似事だ、生まれたての小鹿か? 赤ちゃんでももう少し気合
い入ってるぞー!」

「例えがわからないよ!!」

「おいそこお! 休んでないで動けええ!」

「は、はいイ!」

「いいか? お前らはグズで腰抜けのひよっこだ。お前らは何のためにスクールアイドルやるんだ?」

「学校を救うためです!」

「ならもつと根性見せろオオ!!!」

「…」

な、なに、これ？

こんなことをいつもやっているの？こんな練習とかもはや訓練に近いんじゃない。

アメリカの軍隊じゃあるまいし…

見に来てって言われて来てみたらこれだし、

もう、意味わかんない…

穂乃果達の練習もとい訓練を階段の下から見ている少女

その少女の背後に迫る影は一体…

No. 10 「男の股間は蹴るものじゃない」

「はあ、はあ、きつ、すぎ、る」

「ほらよ」

「ありがとう」

大の字になって死にそうになっていることりと穂乃果に、蓮はスポドリやタオルを渡した

そろそろ海未に変わるか

「海未、そろそろ変わって欲しいんだけど、いいか？」

「はい、いいですよ」

（た、助かった…）

「と思っていたのですか？」 ニコッ

「!？」

その時

『きゃああああ!!』

「!?!?!」

階段の下の方から悲鳴が聴こえた

「下の方か、お前らはここにいろ！」

「ちよつと蓮くん!？」

蓮は階段を駆け下り、悲鳴が聴こえた方へ急いで向かった

そこには

「ふむふむ、まだまだ発展途上つてところやな」

「な、なにやってんのよ！」

後ろから真姫の胸を揉みしだき、解析している希がいた

真姫は希の腕を振りほどき、自分の胸をガードした

「おい変態」

「!？」

「なんや蓮君かいな、もうくビツクリさせんどいて〜」

「ビツクリさせて悪かったな、じゃねえよ。何副会長が一般生徒にセクハラしてんだよ」

「いやー、それはあれやん？真姫ちゃんがどのくらい成長してるのか確認しただけやん」

「黙れおっさん」

「ウチはおっさんやなくてピチピチの女子高生やで」

「じゃあこう言い替えた方がいいかな？おばさん」

「んな! ちよつと蓮君、いくらウチでもお婆さんは傷付くんよ! 小さくて可愛いからつて、お婆さんは言つたらあかんよ!」

「可愛い言うな!」

「男子なのに小さくて女の子顔だし、可愛いと思われるのは本当の事だし仕方のないことなんじゃない? それとなんで私の名前知つてんのよ!」

「ウチは副会長やで? そのくらい知つても不思議はないやん?」

くつ、真姫がここまで刺さることを言うとはな…

「まあええわ。ウチはまだバイトがあるから、またな」

「ちよつと、まだ話は…」

「ほな」

真姫は何か言いたそうだったが、希は戻つて行つた

「来てくれたんだな」

「何が?」

「練習、見に来てくれたんだろ?」

「ち、違うわよ、たまたま近くを通りかかったから見ただけで、べ、別にわざわざ見に来てわけじゃないから!」

・ ・ ・ 恐らく、いや間違いない…

真姫は、ツンデレだ!!

「な、なによ」

「なんでもない…」

(やったあ! やったあ! こんなわかりやすいツンデレいたんだあ♪ゲームやアニメにかいないと思ってたのに、いたんだあ♪)

蓮は表情こそ表に出さないが、内心ものすごく喜んでいた

「そう、なら私は帰るから」

「ありや? どこか行くとところがあるんじゃないやなかったのか?」

「あ、そ、そうだったわ、それじゃあ」

「本当はわざわざ見に来たクセに」

そう言われると真姫は顔を茹でダコのように真っ赤にして

「うるさいっ!」

「Oh!」

蓮を蹴り上げ、しかも丁度蓮の股間にクリティカルヒットし、蓮は抱え込むように地面にうずくまった

「あーそうそう蓮君言い忘れてたことがあった、んやけ、ど」

希が戻ってきたが、うずくまって股間を抑え、苦しみ悶える蓮、それを腕を組んで見

下す様に見る真姫。

それを見て希は何秒か立ち止まって考え、理解した

「真姫ちゃん、男の子にそれはアカンよ…」

「あ、」

希に言われ、真姫は一瞬やってしまった、という顔をしていたが振り返りその場を去って行った…

「ま、真姫」

それはないだろ、

「ああ、痛かった」

「大丈夫？どうしたの？」

「ことりが心配そうに話しかける

「大丈夫だ、問題ない」

「それ大丈夫じゃないよね？」

「元ネタを知ってるのだろう、ことりがつっこんだ

「大丈夫だ、問題ない略して「大問題」だ！」

「何上手いこと言っているのですか」

ドヤ顔で言った蓮に対して海未は冷めた表情でつつこむ

「そういえばこいつらちゃんと決めてるのかな」

「穂乃果ちよつと聞いていいか？」

「何？」

穂乃果がそう返すと、蓮の脳裏に曲があるのかと聞いた時の記憶が蘇った

「いやいや、まさかねw」

流石に決めているだろう

蓮よ、それをフラグと言うのだ

「名前ってあるか？」

「名前？何言ってるの、無いわけじゃないじゃん、ちゃんと高坂穂乃果って名前があるよ！無かったら穂乃果は誰なの?!」

「あ、ごめん間違えた。お前らの”グループの名前”あるか？って聞きたかったんだ」

「なーんだ、それなら早く言つてよ」

「決まってるのか？」

「当たり前だよー。つてなんの？」

「…お前らのグループ名」
・
・

「「あ、」」

もう1つの日常

銃の世界

銃声が降り注ぐ中

少年はいた…

「……………」

あと少し…

そう思いながら少年はスコープを覗き込み標的目掛けて引き金を引く

「The end…」

これは、星空蓮の「もうひとつの日常」のお話

〈教室〉

少年は一人、教室でジャンプを読んでいた

今週も銀魂面白いな、でももうすぐ終わるんだよな……
はあく

「ねえ、聞いた？例の『流星』の話」

ん？あー、またあの話か……飽きないよな

すると、1人の女子が近づいて来た

「ねえねえ、蓮くんはゲームってやってる？」

「いつきか」

こいつは渡辺いつき、クラスメイトだ

「自己紹介どーも、って！それだけ!?もつと何かあるじゃん!!」

「面倒だったから、それに間違ってるないだろ？」

「と・も・だ・ち!!」

「あー、はいはい友達ね友達」

「ぐぬぬぬ…… だったらもう」

私自信が自己紹介します！

私の名前は渡辺いつき、蓮くんとは中学の頃からの友達です！そしてゲーマーなのであります！イエーイー！

「……………で、やってるけどそれがどうした？」

「そんなゴミを見るような目で見ないでよ……いや、いつもジャンプ読んでるからゲームやってるのかな？つと思つて、」

「一応俺はかなりのゲーマーだぞ……にしてもみんなよく飽きないよな、いつも同じ話で」

「だってその人と勝負した人はみんなやられちゃつてるんだから」

「単純にその人に挑んだ人が弱かつただけじゃないの？」

「いやいや、そこそこ有名な上位ランカーもみんな始まってすぐにやられちゃつたんだよ？」

「へえー、それはスゴいなー」

棒で返事をした

「だからさっ！星空くんもやろうよ！」

「え」

「ハッ！まさか！」

「ん？」

「ハード持つてないの!？」

なんでそうなる

一応ハードとソフトは持つてるよ

ただ俺はずっとソロプレイだったから誰かと一緒にやるのが面倒だったから、それだけだよ!!

「じゃあやろうよ!!」

「心を読むなあ!」

く自室く

「はあ、なんで俺がこんな目に…」

あれから断り続けたが、諦める気配がないので仕方なくやることにした

ゲームのタイトルはGGO、ガンゲイルオンラインである数年前にソードアートオンライン（通称SAO）というアニメに登場するナーブギアというハードを開発し、発売された。

それから、アニメだけのジャンルであったVRMMOというジャンルができ、今や多くのVRMMOがある。勿論デスクゲーム（ゲーム内で死んだら現実でも死ぬ）なんてものはない。

そのなかでも人気なのがこのガンゲイルオンラインで、GGOはアニメでも出てきた

ゲームだ

元々アニメの人気の高いせいとかGGOを売ってる店では1週間売り切れが続いたという…

そしてナーブギアでゲームの世界に行くときは勿論あの言葉だ。

「リンクスタート!!」

くGGO世界くSBCグロツケンく

「……………」

よし、今回もエラーなくログインできたみたいだな

蓮は自分の身体を見て、どこにも異常がないことを確認した

蓮のアバターは茶色がかった黒のミディアムで身長は170cmくらい。勿論男アバターである

「確か集合場所はここの武器屋入口前だったよな」

マツプを見ながら武器屋を探す

そして

「ここだな、えーと…あれ、か？」

武器屋の入口前で女性プレイヤーが辺りをキョロキョロしていた。

するとこつちに気付いたその女性プレイヤーが近づいてきた

「Are you Ren?」（あなたは蓮ですか?）

なぜ英語なのだろうか、まあ一応英語で返す

「……Yes, it is.」（……はい、そうです。）

「……」

なんだ、この空気は…すごく気まずい…とにかくこちらから話し掛けてみよう

「えーと、お前いつ「蓮くん!!」うわっ！っていきなり抱きつくな！」
目をキラキラさせながら抱きついてきた

「苦しい良い匂い可愛い離せ！」

こいつ、穂乃果よりたちが悪いぞ！

いや待てよ？あ、一緒だ…

く現実く穂むらくく

「クシユン!!んあ？」

くGGO世界くSBCグロツケンく武器屋入り口前く

「ええい！離せ！」

いつきをなんとか引き剥がした

「ちえ、蓮くんのケチ」

なんでそうなる…

「別にケチでも何でもないだろ…」

いつきを見ると小動物のようなキラキラと純粋な目で見てきた。やめろ、そんな目で見るな罪悪感半端ないから

「で、何するんだ？レベリングか？金稼ぎか？素材集め？」

そう言いながらメニューを開くとちようど「第4回ランキングイベント『Bullet of Bullets』明日開催、上位10位以内に入ったプレイヤーには豪華アイテム、賞金が!？」とお知らせに書いてあった

「それとも…」

と言いかけたところでやめた。なぜならソロでの参加なら普通にランキング上位を狙って豪華なアイテムやら金やらをゲットしに行くが、タッグを組んでランキングイベントにエントリーするとなると相手を守りながら敵を倒すという俺にとっては結構な足手まといになるのだ。

だがこいつは

「あ、そうだ！今ランキングイベントやってるでしょ!?!それに二人でエントリーしようよ!!」

まあ、お前の場合そう来るよね…わかってはいたけどやっぱりかっと思うと、ね…

「それにタッグなら色々と安心でしょ？」

バカその逆だ、タッグなんて足手まといにしかならないから今まで誰とも組まずにソ

ロプレイを貫き通してきたつてのに……まあ本当は誰も組む相手というか友達がいなかっただけなんだけどな、自分で言つてて悲しくなるよ

「えーつと……」

ん？こいつ何してんだ？タッグなら組まねえぞ？それとも装備変えて俺とタッグ組もうとしてんのか？どつちにしろ無理だぞ

「あ、出来た！」

ん？何したんだ？何が出来たんだ???

ピロンツ♪蓮の目の前にウインドウが表示された

ん？なにになに？『バレット・オブ・バレッツ』にエントリーありがとうございます」

……え？

「な、なあ今お前、何した？」

「え？エントリーしたけど、何か？」

……え？

今何て言った？エントリー？どういうこと？

まさかタッグエントリーじゃないよな？違うよね？違うつて言つて

すると

いつきの方にもウインドウが表示されたのかこちらに笑顔で振り向いた

「良かったね！これで私達仲間だよ♪」

はい終わったく、そんな嬉しそうな顔されてもこちら全然嬉しくないんだよ、どっちかかって言うのと最悪な気分だよ、どうしてくれんだこの野郎!!

「お、お前なああああ!!どうしてくれんだ!!俺一人ならともかくタツグって!!勝てるわけねえだろ!」

「えー、そうかなー?」

いつきはキョトンとした顔で言った

「はあ、こうなったら…俺と1対1で勝負しろ、それでお前の実力が悪かったらエントリーを取り消してもらおうぞ」

「わ、わかった!」

「よし、それじゃあここから近い草原エリアまで移動するぞ」

「わかった」

く草原エリアく

そうして蓮達は草原エリアで戦った…

結果は蓮の勝ちだが、蓮のHPが残り4割を切っている状態だった。

「はあ、はあ、本気を出していないとはいえ、ここまでとはな…流石に焦った…」

「これで、認めてくれる…?」

「ああ、これなら10位以内と言わずもしかしたら1位狙えるかもな…」

本当に狙えるかもしれない

まさか至近距離で撃つたのにそれを身体を思いつきり反って避けるだけでなくそのままサマーソルト決めてくるとは、正直ビックリしただけじゃ済まなかった

「やったああー!」

いつきは嬉しいのか、ぴよんぴよんジャンプしていた

「それじゃあよろしくな」

蓮は手を差し出した

「うん♪」

いつきは蓮の手を取り、握手した